

書記官戸田秋成 左ノ按ヲ朗讀ス

第十四
第四條 右ノ手續ヲ了リタル時日ヲ以テ其土地所有權移轉ノ時日

ト看做シ地租並地方稅ハ買受人若クハ讓受人ヨリ之ヲ徵收スヘシ

○番一 周布 外 公 平

縱令戸長ノ與書割印ヲ要セサルモ所有權ハ轉移シテ

妨ケナキモノナリ然レトモ重典賣ノ如キ弊害アルヲ以テ止ムヲ得

ス此法律ヲ要スルモノナルカ故ニ原按ノ如ク地券書換ヲ爲サ、ル

モ所有權ノ轉移ハ戸長ノ與書割印ヲ爲セシ時日ヲ以テ其限界ト爲

スヲ適當トス明治八年第四百四十八號建物賣買讓渡規則第二條ニ建

物買受又ハ讓受ヲ爲サント欲スル者ハ自身又ハ其代人建物所在ノ

戸長役場ニ至リ建物書入質記載帳ヲ見合セタル上ニテ其賣渡讓渡

ノ證文ヲ受取り然シテ後ニ戸長役場ニ至リ戸長又ハ副戸長ノ面前

ニテ何大區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ買受讓受タル旨

ヲ書入質記載帳ニ記入シ年月日並ニ苗字名ヲ記シ實印ヲ押スヘシ

若シ此手續キヲ爲サ、ルトキハ建物買受讓受ノ效ナキ者ニ付云々

トアルヲ明治十年ニ至リ第六十號ノ布告ヲ發シ若シ以下ノ數行ヲ

刪除セシナリ然ルニ本按ノ如ク右ノ手續キ了リタル時日ヲ以テ其

土地所有權轉移ノ時日ト看做シ云々トスルトキハ其手續了リタル

時日ト云フハ戸長役場ニ達シタル時ヲ指ス乎將タ管轄廳ニ達シタ

ル時ヲ云フ乎其限界明瞭ナラス或議官ハ賣讓者ノ片言ヲ聞テ其所

有權ヲ移轉スルハ不可ナリト云フト雖モ是レ決シテ然ラス苟モ買

受者讓受者ノ間ニ未タ訂約ヲ了セシテ其所有權ノ轉スル者ハ萬

ナキヲ以テナリ且看做ノ字ハ確定ノ意ニアラスシテ曖昧ナルモノ

ナリ此ノ如キ字面ヲ法律文ニ掲クルハ最モ不可ナリ仍テ原按ノ如クセンコヲ欲ズ

○十一番 山口 尙芳 土地賣買授受ノ際ニ其所有權轉移ヲ定ムルハ萬國普通ノ原則ナリ佛國ノ民法ニハ家屋ハ其鍵ヲ渡ズヲ以テ限界ト定ム然ルニ原按ノ如ク賣讓者ノミノ片言ヲ以テ其與書割印ヲ受ケ所有權ノ既ニ買主ニ移轉シタル者トスルハ孟浪杜撰ト言ツヘシ土地賣買ノ順序ヲ整理スルニ僅々五六條ノ短篇ニシテ能ク盡ス所ニアラスト雖モ亦一定ノ法則ナカル可ラス故ニ第一條ヨリ第三條迄ニ申明セシカ如ク其順序ヲ了シタルヲ以テ右ノ手續ヲ畢リタルモノトナセリ若シ其時日ヲ確定セハ爲メニ拘束セラレテ窮屈ニ陥ルヘシ良シヤ其明文ヲ掲ケサルモ事實ニ於テ賣者ハ價金ヲ欲シ買主ハ地

所ヲ欲スルヲ以テ必ス同時ニ之ヲ爲スハ疑ヲ容レス然レハ之ヲ必要トセスト看做トセシハ同時ニ授受スルハ原則ナルモ時アリテ其地券ノ授受未タ畢ラサルモ既ニ其手續ヲ經ハ全ク了シタル者ト看做スモノアリ故ニ此字面モナカルヘカラサルモノニシテ決シテ曖昧糢糊トハ云ヘカラス

○四番 福羽 美静 第一條ニハ與書割印ヲ爲シトシ第三條ニハ戸長ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシト記シ本條ニハ右手續キヲ了シタルト云フ其手續ヲ了スルトハ果シテ孰レヲ指スヤ茫漠トシテ了解シ難シ且賣買ハ信用ヲ主トシ讓受ハ恩惠ヲ主トスルヲ以テ茲ニ些々タル月日ヲ伸縮スルハ固ヨリ有ルヘキコナルカ故ニ今之ヲ修正シテ與書割印ヲナセシ時日ヲ以テト改メ事爲ヲ確乎タラシムルニ如カス其看

做ト云フカ如キ曖昧ナル字面ヲ用ルヲ要セサルナリ

○廿三番 柳原前光 賛成

○議長 四番ノ動議ニ賛成アルヲ以テ問題トナス

○廿八番 前島密 右ノ手續キノ了リタル時日云々トハ第一第二第三條

ニ示セシ手續ヲ完了シ始メテ其所有權轉移ノ時日ト爲ス者ニシテ
看做ノ字ヲ用ヒシハ後來記簿法ヲ創設スルニ至テハ地券ハ無用ニ
屬スルヲ以テ必ス然ラント雖モ現今記簿ノ法ナケレハ既ニ其性質
ヲ備ヘタル地券ノ書換ヲ願フヲ以テ即チ其所有權拋棄ノ時日トス
ルヲ可トスレハナリ今看做ノ字ニ代ルニ確定ノ字ヲ用フレハ可ナル
カ如シト雖モ未タ書換ノ地券ヲ領收スルニ至ラサル上ハ確定ノ字
モ亦用フヘカラス唯彼ノ戸長ノ與書割印ヲ以テ移轉ノ時日トシ其

限界ヲ定ムルトセハ或ハ地券ノ書換ヲ等閑ニ附スル者ナキヲ保タ
サルナリ

○十二番 河野敏鎌 戸長ノ與書割印ヲ請フハ則雙方ノ契約ヨリ來ル者ナ

リ此時日ヲ以テ轉移ノ限界ヲ劃定スルモ敢テ不可ナシ凡テ自己身
上ニ關スルモノハ注意一層綿密ニスヘキハ人情ノ常ナリ土地賣買
ノ如キハ固ヨリ雙方ノ協議熟談ニ出テ互ニ利ヲ圖ルニ汲々タルヲ
以テ毫モ危殆ノ憂ナキ者ナリ然ルヲ若シ本按ノ如クセハ却テ現行
ノ手數ヨリ更ニ幾層ノ多端ニ涉リ從テ幾分ノ勞費ヲ増ハ最モ理ノ
見易キモノトス四番ノ修正ハ大ニ吾意ヲ得タリ之ヲ賛成ス
○十七番 楠田英世 四番ヲ賛成ス歐洲各國ハ記簿ノ法アリ我邦之ニ換ル
ニ地券ヲ以テス思フニ看做ノ字ハ是ニヨリテ填用セシモノナルヘ

シト雖モ齊ク看做トセハ寧ロ戸長ノ奥書割印ヲ以テ登記ト看做モ可ナリ故ニ之ヲ削除スルヲ可トス

○十一番^{山口} 戸長ノ奥書割印ハ重典賣等ノ有無ヲ公證スルニ過キス然ルヲ之ヲ以テ所有權轉移ノ限界ト爲スハ不適當ナリ戸長ノ奥書割印ヲ爲シタル證書及ヒ地券ヲ授受シテ然ル後始メテ其賣買ノ約定ヲ完全セシ者ト言フヘシ原按戸長ノ奥書割印ヲ爲セシ時日ヲ以テ所有權轉移ノ時日ト定メ地租并ニ地方稅ハ買受人又ハ讓受人ヨリ之ヲ徵收スヘシト掲載セシ主意ハ殆ント了解ス可ラス若シ佛國民法ニ掲ケタル公正ノ證書ノ如ク公証人タル官吏ノ面前ニ於テ奥書割印スルノ法アラハ固ヨリ間然ナシト雖モ我邦戸長ノ奥書割印ハ之ト異ニシテ唯其重典賣等ノ有無ヲ證スルニ過キサルナリ故

ニ本案ノ如クスルヲ可トス

○^外一番^{周布} 雙方賣買ノ約定證書ニ對シ戸長之ニ奥書割印ヲ爲スハ則賣買約定ノ成果ト言モ可ナリ縱ヒ即時ニ地券ヲ附與セサルモ其契約ノ成立ハ確乎不動タリ然ルニ猶ホ契約未タ結了セスト言フハ太タ了解シ難シ若シ本按ノ如クセハ其土地ハ既ニ買者ニ交付セシモ未タ其地券ヲ書換サルヲ以テ其地ニ屬スル義務ハ依然賣主ノ之ヲ負擔セサルヲ得ス此ノ如キハ賣主ニ於テ其損害ヲ生スルヤ明瞭ナリ

○議長 時既ニ正午ナルヲ以テ本日ハ爰ニ閉會スヘシ

正午十二時閉場

元老院會議筆記明治十二年七月十四日
○第四百十五號議案 土地賣買 第二讀會 七月十一日續
議長 熾仁 親王
出席議員
一番 東久世通禧
三番 伊集院兼寛
四番 福羽 美靜
五番 秋月 種樹
六番 大久保一翁
七番 齋藤 利行
十一番 山口 尚芳

元老院會議筆記明治十二年七月十四日
○第四百十五號議案 土地賣買 第二讀會 七月十一日續
議長 熾仁 親王
出席議員
一番 東久世通禧
三番 伊集院兼寛
四番 福羽 美靜
五番 秋月 種樹
六番 大久保一翁
七番 齋藤 利行
十一番 山口 尚芳

十二番 河野 敏鎌
 十四番 中島 信行
 十五番 津田 眞道
 十八番 津田 出
 二十番 佐野 常民
 廿一番 岩下 方平
 廿三番 柳原 前光
 廿四番 細川潤次郎
 廿六番 伊丹 重賢
 廿八番 前島 密

○議長 第百四十五號議案第二讀會ノ續會ヲ開ク前會ノ問題ニ接續
 シテ發議スヘシ

○四番 福羽 美靜 本按ノ主意ハ太々茫漠ナルヲ以テ之ヲ修正スルノ動議
 ヲ發セシカ尙ホ審按スルニ特ニ本條ノミヲ修正スルニ止ラス沂テ
 前條ニモ亦修正ヲ及ホサ、ル可ラサルモノアリ仍テ特別ノ建議ヲ
 爲サントス則全部ヲ以テ再ヒ修正委員ニ附シ更ニ精整ノ調査ヲ委
 托シ其報告ヲ得テ後開議スルモ未タ晚シトセス曾テ本院ニ此慣例
 アルヲ以テ肯テ之ヲ要ムルナリ

○廿三番 柳原 前光 昨年第一號議案ノ如キモ數回委員ニ附托シテ調査
 セシ前例アリ仍テ四番ノ建議ヲ賛成ス

内閣委員 番外 太政官權少書記官周布 公平

午前第九時三十分開場

○議長 第百四十五號議案第二讀會ノ續會ヲ開ク前會ノ問題ニ接續
 シテ發議スヘシ

○四番 福羽 美靜 本按ノ主意ハ太々茫漠ナルヲ以テ之ヲ修正スルノ動議
 ヲ發セシカ尙ホ審按スルニ特ニ本條ノミヲ修正スルニ止ラス沂テ
 前條ニモ亦修正ヲ及ホサ、ル可ラサルモノアリ仍テ特別ノ建議ヲ
 爲サントス則全部ヲ以テ再ヒ修正委員ニ附シ更ニ精整ノ調査ヲ委
 托シ其報告ヲ得テ後開議スルモ未タ晚シトセス曾テ本院ニ此慣例
 アルヲ以テ肯テ之ヲ要ムルナリ

○廿三番 柳原 前光 昨年第一號議案ノ如キモ數回委員ニ附托シテ調査
 セシ前例アリ仍テ四番ノ建議ヲ賛成ス

○十一番 山口 前ニ本按ヲ修正委員ニ附托シタルハ第一讀會ニシテ

討論未タ盡サ、ル所アルヲ以テナリ今ヤ反覆審議ノ末更ニ之ヲ委員ニ附托セハ必ス精確允當ナル修正ヲ得ヘキヲ信ス仍テ四番ノ建議ヲ賛成ス

○議長、四番ノ建議ヲ可トスル者ハ起立ス可シ

○議長、多數可トシタルヲ以テ四番ノ建議ニ決シ

中島 廿八番 前島ノ外更ニ四番 福羽 十五番 津田ヲ以テ委員ト爲シ其報告ヲ得テ後開議スヘシ散會セヨ

午前第九時四十分閉場

元老院會議筆記明治十二年七月二十一日

○第百四十五號議按 土地賣買第二讀會 七月十四日ノ續第百四十號議案檢視ノ後之ヲ開

議長 親王仁

出席議員

- 一番 東久世通禧
- 二番 水本 成美
- 三番 伊集院兼寛
- 四番 福羽 美靜
- 五番 秋月 種樹
- 六番 大久保一翁

七番	齋藤 利行
十一番	山口 尚芳
十二番	河野 敏鎌
十五番	津田 眞道
十七番	楠田 英世
十八番	津田 出
十九番	河田 景與
二十番	佐野 常民
廿一番	岩下 方平
廿三番	柳原 前光
廿四番	細川潤次郎

廿六番	伊丹 重賢
廿七番	河瀬 眞孝

内閣委員番外 太政官權少書記官周布 公平

○議長 第四百十五號議按第二讀會ヲ開ク然ルニ茲ニ原按ト再修正
按トノ兩按アリ今再修正按ヲ以テ本按トナサント欲スル者ハ起立
ス可シ

起立者十八人

○議長 多數ニヨリ再修正按ヲ以テ本按トナス

書記官戸田 秋成

左ノ按ヲ朗讀ス

布告按

土地賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條此旨布告候事

但明治八年^六月^十第六號布告并同年^十月^{十三}號布告廢止候事

○議長 發議ナキヲ以テ本按ヲ可トスル者ハ起立セヨ
全員悉起立

○議長 全員悉ク可トシタルヲ以テ本按ニ決ス

書記官 戸田 秋成 左ノ按ヲ朗讀ス

土地賣買讓渡規則

第一條 凡ソ所有ノ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡サント欲スル者ハ 賣渡
證文ニ地券ヲ添ヘ其地ノ戶長役場ニ差出シ奧書割印ヲ受ケ之ヲ
買受人又ハ讓受人ヘ附與スヘシ同時ニ地券 書換 願書ヲ双方連印
ノ上同役場ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシ
但一筆ノ土地ヲ分割シテ奧書割印ヲ受ケント欲スル者ハ其分

界及坪數等ヲ詳記シタル圖面ヲ添ヘテ差出スヘシ

○外番一_番 周布 本按ノ大眼目ハ第三條即チ原按ノ第四條ナリ前會既

ニ第四條ニ至リテ終ニ再修正ニ歸着セリ仍テ本會ニ於テモ第四條
マテヲ連帶シテ審議ニ附セラレンコトヲ希望ス

○議長 本案第四條マテヲ連帶シテ議スルヲ可トスル者ハ起立スヘ
シ

起立者十人

○議長 多數ニヨリ第四條マテ連帶シテ議スルニ決ス

書記官 戸田 秋成 左ノ按ヲ朗讀ス

第二條 戶長役場ニ於テハ豫メ土地賣買讓渡奧書割印帳ヲ備置キ
奧書割印ヲ請フモノアレハ地所質入書入奧書割印帳ヲ見合セ登

記ナキニ於テハ讓渡證文ニ與書割印ヲナスヘシ

第三條 買受人又ハ讓受人讓渡證文ヲ領取スルハ地券書換願書

ニ双方連印ノ上地券ヲ添ヘ戸長役場ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシ

第四條 第一條ノ手續ヲ以テ其土地所有權ヲ移轉スルコトヲ得ト雖

地租并地方稅ハ地券ニ記載セル姓名ノ者ヨリ之ヲ徵收スヘシ

但地券紛失ノ際下附願出ルモ亦タ地券ニ記載セル姓名ノ者タ

ルヘシ

○番一外_{周市} 下附ノ原按ト本案トヲ見ルニ其主意ハ大同小異ナリ

ト雖モ原按第三條ヲ一筆ニ抹殺シ去リ其意ヲ第一條ヘ移シ數字ヲ

補ヒ其手續ハ必ス同時ニ爲サシメントスルモノナリ然レモ必ス其

手續ヲ同時ニ爲サシメントスルハ頗ル急迫ニ過クルニ似タリ仍テ

原按第三條ノ末文ヲ恢復シ其罰則ヲ示シ稍之ヲ寬貸セント欲ス

○十二番河野 聊カ修正ヲ提出セントス第三條ノ買受人若クハ讓受

人トアル若シクハ「」字ハ兩様ニ係ルノ文法ナルヲ以テ第一條ニ買

受人又ハ讓受人トアルニ倣ヒ前後同一ナル文法ヲ用ヒントス又第

四條ノ但書ニ先所有主故障アリテ云ヤト掲載アリト雖モ所謂故障

トハ特ニ土地ノミニ屬スルニ非ス疾病事故モ亦故障ナラサルハナ

シ然ルニ本文ノ如キハ單ニ土地ニ附看シテ人ニ附着セサル者ノ如

キ嫌ヒアリ故ニ公債証書發行條例ノ例ニ依リ但本條期限内ニ願書

差出シ難キ事由アレハ其趣ヲ届ケ出ヘシト改刪セハ可ナラン尙ホ

字句ノ如何ハ更ニ第三讀ヲ待テ提出スヘシ

○四番福羽 賛成
美静

○議長 十二番ノ動議ニ賛成者アルヲ以テ問題トナス

○十二番 河野敏録 第四條ノ修正ハ既ニ腹藁成ルヲ以テ直ニ之ヲ提出スヘシ則チ但シ本條ノ期限内ニ書換裏書差出シ難キ事由ヲ該期限内ニ届出ル者ハ此限ニアラスニ作ラントス

○十一番 山口尙勞 十二番ノ修正ハ太タ允當ナリ仍テ之ヲ賛成ス

○外番 周布公平 夫レ第四條ニ掲クル土地ノ故障ト云フハ遺産相續等ノ事件ニ由テ物議紛論ヲ生セシ者ヲ指スナリ其疾病事故ノ如キハ已ニ六月以内ノ期限アレハ足レリトス若シ妄ニ此區域ヲ宏濶ニセハ或ハ種々細故ヲ口實トシ其納税ノ期ヲ弛シコトヲ圖ル者ナキヲ保タサルナリ

○十二番 河野敏録 第四條ハ其所有權ノ歸着既ニ確定セシ後ニ係レリ畢

竟願書ヲ差出ス時ニ方リ已ヲ得サル事由アリテ之ヲ遷延スル所以ヲ届出シムルナリ何ソ納税ノ期ヲ愆ルノ憂アラシヤ既ニ其期ヲ愆ル者ナキハ信シテ疑ハサルモ尙ホ一層ノ餘地ヲ與ヘント欲スルナリ

○外番 周布公平 本條但書ノ主意ハ其所有權未タ定マラスシテ遷延スル者ヲ指ス故ニ原按但書ニ其土地ニ故障アリテ讓受遷延セシ者ハ此限ニアラスト云ヘルヲ熟讀玩味セハ其意自ラ明瞭ナルヘシ修正說ハ其精神ニ反スルヲ以テ非ノ一字ヲ呈セサルヲ得サルナリ

○十二番 河野敏録 本官ハ下附原按ノ如何ヲ問ハス唯本按ニ就テ討論セシノミ本按第一條ニ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡ス者ハ賣渡讓渡證書ニ地券ヲ添テ戸長役場ニ差出シ與書割印ヲ受テ之ヲ買受又ハ讓受人

十
へ附與シ同時地券書換願書ヲ双方連印ノ上ニ差出スヘシト記載シ
而シテ第四條ニ至リテハ土地ヲ讓受ケタル者云々ト掲載セリ前後
熟觀セハ其所有權ノ轉移シタルハ業既ニ分明ナラスヤ然ルニ尙ホ
未タ移轉シタル者ニ非ストスレハ本按ノ精神ハ全ク泯滅スルヤ明
ケシ

○十一番山口 尙勞 既ニ讓受タル者ハ直ニ記名ノ書換ヲ爲スヲ當然トス
然リト雖モ子ノ父ニ受ケ孫ノ祖ニ受クルハ其授受ノ際ニ於テ尤モ
公明正大ナル者ナルカ故ニ或ハ其手續ヲ爲スニ怠ル如キノ宿弊ナ
キヲ保チ難シ故ニ但書ノ要用下爲ス所以ノ者ハ遺産相續ノ如キハ
往々爭訟ヲ起スコアリ既ニ其事アレハ則チ之ヲ處スルノ法ナカル
ヘカラサルナリ例ヘハ其裁判ノ爲ニ時日ヲ遷延スル如キ是ナリ是

特ニ土地ノ故障トノミ斷言スヘカラサル理由ナリ

○廿番佐野 常民 本案モ亦穩安ナラサルモノアリ何ソヤ明治八年第百六
號布告ニハ地券ノ書換ヲ爲シタル上ニテ始メテ其所有權ノ移リタ
ル者トセリ然ルニ今戸長ノ與書割印セシ時日ヲ以テ所有權轉移ノ
時日ト定ムルト云ハ或ハ輕忽ニ過ル者ノ如シト雖モ其實際ヲ觀察
スレハ其價金ノ授受モ亦同時ニ爲スハ必然ナリ故ニ原按ノ如クス
ルモ肯テ支障ナキナリ

○議長 全篇ニ連帶シテ十二番ノ修正ヲ可トスル者ハ起立セヨ
起立者十六人

○議長 多數ヲ以テ十二番ノ修正ニ決シ第二讀會ヲ閉チ第三讀會ハ
來ル二十四日ニ開ク可シ散會セヨ

午前第十時三十分閉場

第三讀會期報告ノ後ニ修正委員ハ更ニ第三回ノ修正ヲ加フル
ニ依リ其報告ヲ得テ開會ノ期日ヲ卜定スルニ決セシヲ以テ二
十四日ハ延會ス

元老院會議筆記明治十二年八月十二日

○第四百十五號議按土地賣買讓渡規則第三讀會

議長城仁親王

出席議員

- | | |
|-----|-------|
| 一番 | 東久世通禧 |
| 三番 | 伊集院兼寛 |
| 四番 | 福羽 美靜 |
| 五番 | 秋月 種樹 |
| 六番 | 大久保一翁 |
| 七番 | 齋藤 利行 |
| 十一番 | 山口 尚芳 |

午前第八時三十五分開場

内閣委員番外 一番 太政官權少書記官 周布 公平

十二番 河野 敏録

十六番 山田 顯義

十八番 津田 出

十九番 河田 景與

二十番 佐野 常民

廿一番 岩下 方平

廿三番 柳原 前光

廿四番 細川潤次郎

廿七番 河瀬 眞孝

○議長 第四百四十五號議按第三讀會ヲ開ク可シ

○廿四番細川潤次郎 議按ノ朗讀ニ先チ建議スル所アラントス本按ハ極

テ短簡ニシテ爲ニ意義穩妥ヲ欠クモノアルヲ以テ兩回ノ修正ヲ經

己ニ第二讀會ヲ完了セシト雖モ尙ホ未タ完全ナラサルニ依リ更ニ

委員ヲ命シ復タ之ニ修正ヲ加ヘタリ而シテ其報告以來既ニ數日ヲ

經過セシヲ以テ其可否得失ハ必ス各自暉然タルヲ信スト雖モ如何

セン第三讀會ハ唯一回ノ發論ニ止ルノ成規ナルヲ以テ或ハ恐ル討

論ノ盡キサル所アラントシ仍テ之ヲ第二讀會ノ性質ニ復シ反覆討

論毫モ餘蘊ナキニ至ラシムルニ非レハ不是ナリ願クハ本日ノ第三

讀會ヲ以テ第二讀會ト爲シ再修正按ト第三回修正按ト孰レヲ以テ

本案ト爲スヘキヤヲ決セラレントヲ希望ス

○議長 本會ヲ第二讀會ト爲シ第三回修正按ヲ以テ本按ト爲スヲ可トスル者ハ起立セヨ

起立者十四人

○議長 多數ニヨリ廿四番ノ建議ニ決シ本會ヲ以テ第二讀會トシ第三回修正按ヲ本按ト爲ス可シ

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

布告案

土地賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條此旨布告候事

但明治八年^{六月}第六號布告並同年^{十月}第一百五十三號布告廢止候事

○議長 發議ナキヲ認メ本案ヲ可トスル者ハ起立セヨ
全員悉起立

○議長 全員悉ク可トスルヲ以テ本按ニ決ス

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

土地賣買讓渡規則

第一條 凡ソ所有ノ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡サント欲スル者ハ 賣渡讓渡

證文ニ地券ヲ添ヘ其地ノ戸長役場ニ差出シ與書割印ヲ受ケ之ヲ買受人又ハ讓受人ヘ附與スヘシ

但一筆ノ土地ヲ分割シテ與書割印ヲ受ケント欲スル者ハ其分界及坪數等ヲ詳記シタル圖面ヲ添ヘテ差出スヘシ

○二十四番 細川潤次郎 本按修正ノ主意ヲ單簡ニ辯明センニ原按ノ如ク

第四條ニ戸長ノ與書割印セシ日ヲ以テ所有權移轉ノ時日ト定ムルトキハ其證書ハ地券証ト並立ノ權ヲ有スルノ嫌疑アリ又其地券書

換ヲ以テ所有權移轉ノ時日ト爲ストキハ其地券ノ書換ヲ爲サ、ルモ實地既ニ所有ノ權ハ轉移スルモノモアルヘシ殊ニ其管轄廳ト土地遠隔ナルトキハ地券ニ月日ヲ記入スルニ其割印與書ヲ爲セシ月日ニ復シテ記載セサルヲ得ス此ノ如キ扞格一ニシテ足ラス且公債證書賣買規則ハ其價金ヲ償ヒ賣買ヲ結了シ其所有權ハ既ニ轉移シタルモ猶ホ新所有主ニ書換ヲ了セサレハ其利子ハ原所有主ニ下附スルノ法ナリ地券モ亦公債證書ト同一性質ノ者ナリ仍テ其精神ヲ以テ本條モ亦此ノ如ク修正セサルヲ得サルナリ

○議長 他ニ動議ナキヲ認ム本按ヲ可トスル者ハ起立セヨ
起立者十五人

○議長 多數ニヨリ本按ニ決ス

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第二條 戶長役場ニ於テハ豫メ土地賣買讓渡與書割印帳ヲ備置キ與書割印ヲ請フモノアレハ地所質入書入與書割印帳ヲ見合セ登記ナキニ於テハ 賣渡讓渡 證文ニ與書割印ヲナスヘシ

○議長 動議ナキヲ認ム本按ヲ可トスル者ハ起立セヨ
起立者十五人

○議長 多數ヲ以テ本按ニ決ス

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第三條 買受人又ハ讓受人 賣渡讓渡 證文ヲ領取スルハ地券 書換裏書 願書ニ双方連印ノ土地券ヲ添ヘ戶長役場ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシ

○議長 動議ナキヲ以テ本按ヲ可トスル者ハ起立セヨ

起立者十五人

○議長 多數ヲ以テ本按ニ決ス

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第四條 第一條ノ手續ヲ以テ其土地所有權ヲ移轉スルコトヲ得ト雖
地租并地方稅ハ地券ニ記載セル姓名ノ者ヨリ之ヲ徵取スヘシ
但地券紛失ノ際下附願出ルモ亦タ地券ニ記載セル姓名ノ者タルヘシ

○議長 發議ナキヲ以テ本按ヲ可トスル者ハ起立セヨ

起立者十四人

○議長 多數ヲ以テ本按ニ決ス

書記官 本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第五條 死亡人ノ家督相續若クハ遺產相續ニ由リ土地ヲ讓受ケタル者ハ親族親族ナキモノハ近隣ノ戸主ト連印ノ上戸長役場ヲ經テ地券書換裏書願書ヲ管轄廳ヘ差出スヘシ若シ先所有主死亡ノ日ヨリ六箇月以内ニ戸長役場迄差出サ、ル者ハ科金トシテ証印稅ノ五倍ヲ差出サシムヘシ

但本條期限内ニ地券書換裏書願書ヲ差出シ能ハサル事由ヲ届出ル者ハ此限ニ在ラス

○議長 動議ナキヲ以テ本案ヲ可トスル者ハ起立セヨ

起立者十五人

○議長 多數ヲ以テ本案ニ決シ第二讀會ハ爰ニ訖ル可シ

○四番 福羽美靜 本案ハ數回ノ修正ヲ經テ許多ノ時日ヲ徒過セリ仍テ本

日引續キ第三讀會ヲ開キ確定結了セラレシヲ建議ス

○議長 四番ノ建議ヲ可トスル者ハ起立セヨ

全員悉起立

○議長 全員悉ク可トスルヲ以テ續テ第三讀會ヲ開クヘシ

○十二番 河野 敏雄 茲ニ特別ノ建議ヲナサントス第三讀會ハ逐條議決ス

可キ成規ナリト雖モ本案ハ既ニ數回ノ修正ヲ經且前會ニ於テモ更ニ一ノ異議ナク之ヲ經過シタルヲ以テ稍本則ニ違フト雖モ全篇ヲ聯帶シテ之ヲ議スルノ慣例アルニヨリ本案モ亦全篇連帶ノ決議アラシム

○議長 十二番ノ建議ニ同意ノ者ハ起立セヨ
起立者十五人

○議長 多數ヲ以テ十二番ノ建議ニ決ス

書記官 本田 親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

布告案

土地賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條此旨布告候事

但明治八年^六月^十第六號布告并同年^十月^十第五十三號布告廢止候事

土地賣買讓渡規則

第一條 凡ソ所有ノ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡サント欲スル者ハ 賣渡 讓渡

證文ニ地券ヲ添ヘ其地ノ戶長役場ニ差出シ與書割印ヲ受ケ之ヲ

買受人又ハ讓受人ヘ附與スヘシ

但一筆ノ土地ヲ分割シテ與書割印ヲ受ケント欲スル者ハ其分

界及坪數等ヲ詳記シタル圖面ヲ添ヘテ差出スヘシ

第二條 戸長役場ニ於テハ豫メ土地賣買讓渡奧書割印帳ヲ備置キ
奧書割印ヲ請フモノアレハ地所質入書入奧書割印帳ヲ見合セ登
記ナキニ於テハ賣渡讓渡證文ニ奧書割印ヲナスヘシ

第三條 買受人又ハ讓受人賣渡讓渡證文ヲ領收スルハ地券書換裏書願書

ニ双方連印ノ土地券ヲ添ヘ戸長役場ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシ

第四條 第一條ノ手續ヲ以テ其土地所有權ヲ移轉スルコトヲ得ト雖
地租并地方稅ハ地券ニ記載セル姓名ノ者ヨリ之ヲ徵收スヘシ

但地券紛失ノ際下附願出ルモ亦地券ニ記載セル姓名ノ者タル
ヘシ

第五條 死亡人ノ家督相續若クハ遺産相續ニ由リ土地ヲ讓受ケタ

ル者ハ親族親族ナキモノト連印ノ上戸長役場ヲ經テ地券書換裏書願
書ヲ管轄廳ヘ差出スヘシ若シ先所有主死亡ノ日ヨリ六箇月以内
ニ戸長役場迄差出サ、ル者ハ科金トシテ証印稅ノ五倍ヲ差出サ
シムヘシ

但本條期限内ニ地券書換裏書願書ヲ差出シ能ハサル事由ヲ届出ル
者ハ此限ニ在ラス

○議長 動議ナキヲ以テ本按全篇ニ異議ナキモノハ起立セヨ
全員悉起立

○議長 全會一致可トスルヲ以テ本案ニ決シ例ニ遵ヒ確定決議ノ旨
ヲ具シテ上奏スヘシ散會セヨ

午前第九時閉場

元老院會議筆記明治十二年七月十日

第百四十六號議

○第百四十六號議按徵兵令及近衛兵編制改正ノ儀布告按第一讀會大源

議長親王 王仁

出席議員一番 東久世通禧

二番 水本 成美

三番 福羽 美譜

四番 秋月 種樹

五番 大久保 一翁

六番 齋藤 利行

七番 山口 尚芳

十一番

十三番 河野 敏録
 十四番 中島 信行
 十五番 津田 眞道
 十六番 山田 顯義
 十八番 津田 美出
 十九番 河田 景與
 三十番 佐野 常民
 出題額官廿一番 岩下 方平
 廿三番 柳原 前光
 伊丹 重賢

○第百四十六號議案
 議案會期第百四十二号十月廿六番
 細川潤次郎

廿七番 河瀬 眞孝
 廿八番 前島 密
 内閣委員 一番外 太政官少書記官渡 正元
 二番外 太政官少書記官馬場 素彦
 午前第九時三十分開場
 ○議長 本日ハ第百四十六號議案ノ第一讀會ヲ開ク然ルニ本按ハ條
 項浩濶且頒布以來既ニ幾多ノ日子ヲ經過セルニ依リ諸議官ノ必ス
 熟讀アリシヲ信スルヲ以テ朗讀ヲ省カントス同意ノモシハ起立セ
 全員悉起立
 ○議長 全會一致ナルヲ以テ朗讀ヲ省ク

記者曰左接ハ朗讀ナカリシ者ト雖モ此ニ掲ケテ參考ノ便ニ供ス

布告按

徵兵令及ヒ近衛兵編制別冊ノ通改正候條此旨布告候事
但徵兵令ニ關シタル從前ノ布告達及ヒ指令等ハ渾テ廢
止ス
陸軍徵兵令
朕惟ルニ古者郡縣ノ制全國ヲ壯武軍團ヲ設以テ國家
ヲ保護ス固ヨリ兵農ノ分ナク世以降兵權武門ニ歸シ兵農始
テ分レ遂ニ封建ノ治ヲ成ス城長一新一新ハ實千有餘年來ノ一

大變革アリ此際ニ當リ海陸兵制モ亦時ニ從宜ヲ制セザレハ
カラス今本邦古昔ノ制ニ基キ海陸各國ノ式ヲ斟酌シ全國募兵
ノ法ヲ設テ國家保護ノ基ヲ立シテ欲テ汝百官有司厚ク朕カ意
ヲ體シ普ク之ヲ全國ニ告諭セヨ
明治五年壬申十一月廿八日
其類徵兵告諭
我
朝上古ノ制海内舉テ兵ナラサルハナシ有事ノ日ハ徒然
天子之カ元帥トナリ丁壯兵役ニ堪ユル者ヲ募リ以テ不服ヲ征
ス役ヲ解キ家ニ歸レハ農タリ工タリ又商賈タリ固ヨリ後世ノ
雙刀ヲ帶ヒ武士ト稱シ抗顔坐食シ甚キニ至テハ人ヲ殺シ官其

罪ヲ問ハサル者ノ如キニ非ス抑
神武天皇珍彦ヲ以テ葛城ノ國造トナセシヨリ爾後軍團ヲ設ケ
衛士防人ノ制ヲ定メ神龜天平ノ際ニ至リ六府二鎮ノ設始テ備
ル保元平治以後朝綱頽弛兵權終ニ武門ノ手ニ墜チ國ハ封建ノ
勢ヲ爲シ人ハ兵農ノ別ヲ爲ス降テ後世ニ至リ名分全ク泯沒シ
其弊勝テ言フ可ラス然ルニ

大政維新列藩版圖ヲ奉還シ辛未ノ歲ニ及ヒ遠ク郡縣ノ古ニ復
ス世襲坐食ノ士ハ其祿ヲ減シ刀劔ヲ脫スルヲ許シ四民漸ク自
由ノ權ヲ得セシメントス是レ上下ヲ平均シ人權ヲ齊一ニスル
道ニシテ則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ是ニ於テ士ハ従前ノ士
ニ非ス民ハ従前ノ民ニアラス均ク皇國一般ノ民ニシテ國ニ

報スルノ道モ固ヨリ其別カガルベシ凡ツ天地ノ間一事一物ト
シテ税アラサルハナシ以テ國用ニ充ツ然ラハ則チ人タルモノ固
ヨリ心力ヲ盡シ國ニ報セサルヘカラス西人之ヲ稱シテ血税ト
云フ其生血ヲ以テ國ニ報スルノ謂ナリ且ツ國家ニ災害アレハ
人々其災害ノ一分ヲ受ケサルヲ得ス是故ニ人々心力ヲ盡シ國
家ノ災害ヲ防クハ則チ自己ノ災害ヲ防クノ基タルヲ知ルヘシ苟
モ國アレハ則チ兵備アリ兵備アレハ則チ人々其役ニ就カサルヲ得
ス是ニ由テ之ヲ觀レハ民兵ノ法タル固ヨリ天然ノ理ニシテ偶
然作意ノ法ニ非ス然而シテ其制ノ如キハ古今ヲ斟酌シ時ト宜
ヲ制セサルヘカラス西洋諸國數百年來研究實踐以テ兵制ヲ定
ム故ヲ以テ其法極テ精密ナリ然レトモ政體地理ノ異ナル悉ク

之ヲ用フ可ラス故ニ今其長ヌル所ヲ取リ古昔以軍制ヲ補七海
陸二軍ヲ備ヘ全國四民男兒二十歳ニ至ル者ハ盡ク兵籍ニ編入
シ以テ緩急ノ用ニ備フヘシ地方官厚ク此方勅旨ヲ奉シ徵兵令
ニ依リ民庶ヲ説諭シ國家保護ノ大本ヲ知ラシムヘキ者也
陸軍徵兵令
第一章徵兵編制
第一條 徵兵ハ國民ノ年甫メテ二十歳ニ至ル者ヲ徵シ以テ陸
軍ニ充タシムル者ナリ今陸軍ヲ大別シテ四種トナス其一常
備軍其二豫備軍其三後備軍其四國民軍是ナリ又其兵丁ノ身

材骨格ニ從ヒ兵種ヲ區別ス而テ各種ノ兵皆各軍管下ノ國郡
ヨリ召集シ若干年ノ役ヲ帶シメ所管鎮臺ニ備ヘ以テ地方ノ
守衛ニ充ツ
第二條 常備軍ハ本年徵兵ノ抽籤セシ者ヲ以テ編制シ三ヶ年
ノ役ヲ帶シムル者ナリ
第一項 在營中定額ノ日給ヲ與フ其他食料服類共官給タ
ルヘシ
第二項 強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正シキ者ハ近衛兵ニ
拔擢シ更ニ三ヶ年ノ役ヲ帶シム
但近衛兵編制ハ別ニ記ス
第三項 讀書算術ヲ出來得ル者ハ檢査格例ニ照シ拔擢シ

第三項

テ教導團ニ入レ卒業ノ上下士ニ任ス其學術秀逸
ニシテ殊ニ行狀方正ナル者ハ又之ヲ拔擢シテ士
官學校ニ轉入セシム

第四項

陸軍勤仕ノ望アル者ハ願ニ從テ検査ノ上教導團
ニ入レ學業進歩ノ上拔擢採用スルコト亦第三項ニ

第五項

照準ス

第六項

下士ニ任セラレタル者ハ更ニ十ヶ年ノ役ヲ帶シ

第七項

前七ヶ年ハ常備軍ニ服セシメ後三ヶ年ハ後備
軍ニ服セシム尤其人材ニ由リ後備軍ノ士官ニ任

第七項

輜重輸卒トシテ徵募スル者ハ六ヶ月間常備役ヲ

第八項

陸軍看病卒並ニ諸隊職工トシテ徵募スル者ハ其
後更ニ後備軍ニ編入セシム

第九項

陸軍看病卒並ニ諸隊職工トシテ徵募スル者ハ其
服役年限一般ノ兵卒ト異ナルコトナシ

第十項

兵卒三ヶ年ノ服役ヲ有スル者平時ハ服役未タ終
ラスト雖モ技藝熟練スル者ハ詮議ノ上歸休ヲ許

第十一項

豫備軍ハ常備軍三ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者ヲ以テ編

第十二項

制シ更ニ三ヶ年ノ役ヲ帶シメ常ニ家居シ産業ヲ營マシム而

シテ非常或ハ戰時ニ當リテハ直チニ之ヲ召集シ常備軍ニ加ヘ其員ヲ充實シ又ハ別ニ編隊シテ征軍セシム可キヲ以テ一歳ニ一度屯營ニ召集シ其技藝ヲ復習セシム

第四條 後備軍ハ豫備軍三ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者ヲ以テ編

制シ更ニ四ヶ年ノ役ヲ帶シメ豫備軍ニ繼キ召集スルハキ兵タルヲ以テ平時ニ於テハ屯營ニ召集ヲ要セサルヘシ

徵兵服役已ニ其期限ニ滿ツル者ト雖戰時ハ勿論非常ノ事故アル時ハ其期ヲ延ハサルヲ得ス

第五條 國民軍ハ常備豫備及ヒ後備軍ノ外ニ全國ノ男兒十七歳ヨリ四十歳迄ノ人員ヲ兵籍ニ載セ置キ戰時ニ當リ時機ニ從ヒ隊伍ニ編成スル者トス

第二章 徵兵區域

第六條 凡全國ヲ別ツテ七大徵兵區トシ其軍管ノ區域ニ從フ

モノ之ヲ軍管徵兵區トス

第七條 軍管ニ包轄スル師管ノ區域ニ從フモノ之ヲ師管徵兵

區トス

第八條 師管ニ含有スル府縣ノ管地ニ從フモノ之ヲ府縣徵兵

區トス

第九條 府縣徵兵區ハ一府縣ヲ一徵兵區トナスト雖其管地兩

師管ニ跨ルモノハ每師管ニ一徵兵區ヲ設置スルモノトス

第十條 第七軍管ハ未タ全ク徵兵ヲ行ハサルヲ以テ姑ク之ヲ

第二軍管ノ管轄ニ屬ス

第三章 徴兵官員及ヒ其職掌

第十一條 徴兵使

陸軍佐官一人之ニ任ス鎮臺司令長官ニ隸シ府縣ニ出張シ府縣徴兵事務長ト議シ徴兵ノ事務ヲ總管ス
但時宜ニ由テハ副使ヲ遣シ代理セシム

第十二條 徴兵副使

陸軍尉官ヲ以テ之ニ任ス人員ハ概ネ一師管徴兵區ニ貳人或ハ三人トス正使ヲ佐ケ府縣徴兵事務官及ヒ徴兵副醫官ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ徴兵検査抽籤等ノ事務ヲ掌ル

第十三條 徴兵醫官

陸軍軍醫一人之ニ任ス徴兵使ニ從ヒ兵丁ノ身材骨格兵役ニ

適スルヤ否ヲ検査スル事ヲ掌ル

第十四條 徴兵副醫官

陸軍軍醫副以下試補以上ヲ以テ之ニ任ス徴兵副使ト共ニ検査検査所ヲ巡行シ職掌徴兵醫官ニ同シ人員ハ概ネ一師管徴兵區ニ三人或ハ四人トス

第十五條 徴兵事務官

後備軍府縣駐在官一人之ニ任ス府縣徴兵事務官ト共ニ郡區ヲ巡行シ徴兵下検査ノ事ヲ掌リ又徴兵署ニ出頭シ同署ノ事務ヲ補助ス

第十六條 徴兵書記

陸軍下士或ハ軍屬十等以下十七等迄ノ者ヲ以テ之ニ任ス人

員ハ二人或ハ三人トス徴兵使ノ諸記録ヲ掌ル

第十七條 府縣徴兵事務長

府知事縣令或ハ書記官ノ内一人之ニ任ス管内徴兵ノ事務ヲ掌ル

第十八條 府縣徴兵事務官

府縣屬官ヲ以テ之ニ任ス人員ハ概ネ徴兵副使ノ數ニ準ス徴兵副使ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ府縣徴兵事務長ノ職掌ヲ補翼シ又徴兵事務官ト共ニ郡區ヲ巡行シ徴兵下検査ノ事ヲ掌ル

第十九條 郡區徴兵事務官

郡區長ヲ以テ之ニ任ス人員ハ一郡區ニ一人トス徴兵ノ事ニ

付キ公文ヲ布達シ民情ヲ上伸シ又其郡區内徴兵取調ノ事ヲ擔當ス

但郡區長已ムヲ得サル故障アルハ郡區書記ヲ以テ代理

第二十條 地方徴兵醫員

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員ハ概ネ徴兵八十名乃至百名ニ一人トス徴兵身體ノ下検査ヲナシ又徴兵醫官ノ指揮ニ從ヒ

第二十一條 筆生

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員ハ概ネ一検査所ニ三人トス検査抽籤等ノ件ヤヲ記録シ又下検査所筆記ノ事ヲ掌ル

第二十二條 徵兵使府縣徵兵事務長及ヒ徵兵醫官ハ府縣徵兵署ニ出頭シ徵兵副使徵兵副醫官及ヒ府縣徵兵事務官等ハ分派シテ各徵兵検査所ヲ巡行スル者トス

第二十三條 徵兵使巡行ハ二月十五日ヨリ始メ第三章中ニ掲クル所ノ陸軍官員一行トナリ府縣ニ出張シ地方ノ諸官ト合議シ便宜ノ地ニ於テ徵兵署ヲ開設シ常備ノ定員ヲ充タヌコヨリ免役願出ノ者等總テ徵兵ニ關スル事務ヲ管理シ四月十日ヲ以テ復命スルヲ例トス

第二十四條 府縣ヨリ鎮臺ヘ出シタル徵集名簿ヲ點檢シ其府縣ノ徵兵年齡相當ノ人員ニ應シ本年徵募スヘキ常備補充ノ人員ヲ配當シ又免役ノ箇條書等ヲ調査ス

第二十五條 徵兵諸官ハ本年ノ徵兵事務竣レハ悉ク其職ヲ解ク者トス

第四章 除役免役及徵募猶豫

第二十六條 左ニ掲ル者ハ終身兵役ヲ除ス

- 第一項 癱疾或ハ不具ニシテ陸軍醫官検査規則ニ照シ終身兵役ニ堪ユヘカラサル徵候アル者
- 第二項 徵役一年以上及國事犯禁獄一年以上實決ノ刑ニ處セラレタル者

第二十七條 左ニ掲ル者ハ平時ニ於テ兵役ヲ免ス

- 第一項 戸主タル者
- 但徵兵年齡以前ニ分家シ又ハ新タニ分家シタ

ル女戸主ニ入婿シ或ハ絶家ヲ再興シタル戸主
ハ此限ニ非ス

第二項

嗣子或ハ承祖ノ孫

但長男又ハ長孫ヲ分家セシメ或ハ他家ノ養子

トナシ又ハ絶家ヲ再興セシメ或ハ新タニ分家

シタル女戸主ニ入婿セシメ其二三男二三孫ヲ

シテ徵兵年齢以前ニ更ニ嗣子或ハ承祖ノ孫ト

ナセシ者ハ此限ニ非ラス

第三項

年齢五十歳以上ニシテ嗣子ナキ者ノ養子嗣子或ハ

相續人

但隱居後別家シテ特ニ嗣子或ハ相續人ヲ置ク

第十三項

者ハ此限ニ非ス

第四項

年齢五十歳未満ト雖廢疾又ハ不具ニシテ産業ヲ

營ム能ハサル者ノ養子或ハ相續人

第五項

陸海軍生徒並ニ造船所及ヒ兵器局定雇職工

第六項

陸海軍常備在役中死没又ハ公務ニ因リ疾病或ハ

軍傷ヲ受ケ退隱セシ者ノ兄弟

但豫備軍又ハ後備軍服役中公務ニ起因シタル

第十項

疾病死没モ亦此例ニ準ス

第七項

官吏及教導職補以上ノ者

但準官吏及等外吏ハ此例ニ非ス

第八項

公立學校教員及ヒ文部省所轄學校教員

第九項 文部省所轄師範學校及府縣立師範學校ニ於テ修業一ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒並ニ該學卒業ノ者

第十項 府縣立中學校及專門學校ニ於テ修業三ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒並ニ該學卒業ノ者

第十一項 文部省所轄體操傳習所ニ於テ修業一ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒並ニ體操術卒業ノ者

第十二項 文部省所轄東京大學及大阪專門學校ニ於テ豫科修業一ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒並ニ該學卒業ノ者

第十三項 文部省所轄外國語學校ニ於テ修業三ケ年ノ課

第十四項 外國ニ留學シテ一ケ年以上ノ學科ヲ終リタル證書ヲ所持スル者

第十五項 諸省使ニ屬スル學校ニ於テ官費或ハ貸費ヲ以テ修業一ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒並ニ該學卒業ノ者

第二十八條 左ニ掲ル者ハ平時ニ於テ一時徵募ヲ猶豫スヘシ

第一項 海軍兵員タランコトヲ志願スル者

第二項 陸海軍常備在役中ノ下士卒ノ兄弟

第三項 同年齡ノ兄弟同時ニ徵兵ニ當ル者ノ弟

但其兄不合格ナルハ此例ニ非ス

第四項

陸海軍生徒ノ兄弟

第五項

父及兄或ハ父ガシテ兄失踪又ハ癡疾不具等

第六項

生計ヲ失フ者

第七項

學術修業又ハ商用等ニテ外國へ寄留スル者

第八項

身幹未ダ定尺ニ滿タヌ又ハ疾病中或ハ病後ノ故

第九項

ヲ以テ仍ホ未ダ勞役ニ堪ユルヲ能ハサル者

第十項

犯罪アリ當時裁判未決ニ係ル者

第二十九條

官省院使府縣御用掛御雇等ノ者ハ之ヲ免役セス

ト雖餘人ヲ以テ代フヘカラサル事務ヲ奉スル者ヲ如キハ其

人ニ當リ特ニ太政官ニ具狀シテ裁決ヲ請フヘシ

但諸省使府縣雇入外國人ニ附屬シ官費ヲ以テ技藝傳習中

者亦本條ニ準スヘシ

第三十條

第二十七條第二項ノ嗣子承祖ノ孫及ヒ第三項第四

項ノ養子相續人並ニ第五項ノ陸海軍生徒及ヒ定雇職工二十

三歳以内ニ在テ其名稱ヲ罷メタル者ハ更ニ徵募ニ應セシム

ルモノトス

第三十一條

第二十七條第六項ニ當リ一家兄弟三人以上アル

トハ譬ヘハ奇數ノ兄弟ニシテ甲ヲ免スレハ乙ヲ徵募シ丙ヲ

免ス又偶數ノ兄弟ニシテ甲ヲ免スレハ乙ヲ徵募シ丙ヲ免シ

丁ヲ徵募スヘシ

第三十二條

第二十七條第七項乃至第十三項及ヒ第十五項並

第二十九條ニ當リ免役セザレタル者二十三歳以内ニ在テ
 其職務ヲ離レ或ハ半途退學スルハ更ニ徵募ニ應セシムル
 事トス
 第三十三條 第二十七條第三項第四項及ヒ第七項乃至第十五
 項ノ科目ニ當ル者ト雖モ第六十一條ニ示シタル徵兵各屆
 出期限ヲ過キ即チ九月十六日以後ニ係ル者ハ一切之ヲ免役
 セス
 第三十四條 第二十八條ノ科目ニ當ル者ハ六ヶ年間ヲ限リ徵
 募ヲ猶豫スヘキヲ以テ事故已ニ止ムルハ徵募ニ應スヘキハ
 勿論ナリト雖モ其次年ニ至リ事故猶依然タルハ又其翌年ニ
 至ル迄之ヲ猶豫スヘシ而シテ終ニ二十二歳ニ至ルト雖事故

猶依然タルハ府縣徵兵署ニ於テ詮議ヲ遂ケ平時ニ於テ之
 ヲ免役スヘシ

但第二十八條第二項及ヒ第四項ニ當リ平時ニ於テ免役ニ
 屬スル者ハ第三十一條ノ例ニ準スヘシ

第三十五條 第二十七條第三十四條及ヒ第四十八條並ニ第五
 十條ノ但書ニ當リ平時ニ於テ兵役ヲ免スル者ハ其年齡三十
 歳迄之ヲ豫備徵兵トス而シテ戰時ニ當リ或ハ隊伍ニ編制シ
 或ハ輜重運輸ノ役ニ供スルコトアル可シ

第五章 徵兵検査

第三十六條 徵兵検査定日ハ前以テ徵兵使ヨリ各府縣へ通報
 シ日割ヲ以テ一日幾人ト定メ戸長之ヲ引纏メ出ヘシ

第三十七條 徴兵検査ノ時ニ至レハ府縣廳ヨリ左式ノ罫紙ヲ
 戸長ニ渡シ戸長ハ検査ヲ受クヘキ者ノ戸籍ニ基キ朱書ニ示
 シタル如ク本人ノ姓名産國住所誕生年月日及ヒ戸主タル者
 ノ名並ニ氏神宗門其他同戸籍ノ父母祖父母兄弟妻子等ヲ記
 載シ之ヲ人別表トシ徴兵検査ノ時差出スヘシ

人別表

治明		府縣 國郡區町村 國郡區町村任族及ヒ職業
身幹 尺度	何尺何寸何分	
兵種	戸主名何男兄弟伯叔甥附籍	姓名 何某
番號		

産國ト現今ノ管轄府縣ノ異ナル者ハ表首國郡區町村産ト記
 スルノ上ニ其産國ノ府縣ヲ加ヘ若又寄留地ノ徴募ニ應スル

年 徴 兵 人 別 表									
父	母	祖父	祖母	兄弟	姉	妹	妻	子	
某	同	同	同	同					職業
									名
何年何ヶ月	同	同	同	同					歳
誕生	氏神	宗門	備	考					誕生
年月日	國郡區町村 何神社	同 何宗何寺							

第三十九條 身體検査ヲナス時ハ徵兵副使府縣徵兵事務官及
ヒ郡區徵兵事務官列座スヘシ

第四十條 検査呼出シノ時ニ病氣ニテ出頭シ難キ者ハ最寄地
方醫師ノ診斷書ヲ添ヘ戸長之ニ證印シ郡區長ヲ經テ検査所
ヘ願出ルルハ時宜ニ由リ他ノ検査所ニ出頭セシメ又ハ其家
ニ就キ之ヲ審査シ或ハ翌年ノ検査ニ廻スヘシ

第四十一條 検査呼出シノ時ニ父母ノ喪ニ罹リ未タ三週間ヲ
過キサル者或ハ父母ノ重病又ハ一家ノ安危ニ係リ一時已ム
ヲ得サル事故生スル者ハ其事實ヲ詳記シ戸長之ニ證印シ郡
區長ヲ經テ検査所ヘ願出ル者ハ上條ニ準シ之ヲ處分スヘシ

第四十二條 徵兵署ニ隔リタル郡區ハ徵兵副使徵兵副醫官及

府縣徵兵事務官一行トナリ組ヲ分チ巡廻セシメ相應ノ場
所ニ於テ徵兵検査所ヲ設ク其式本署ニ異ナルカナシ

第六章 抽籤

第四十三條 抽籤ハ徵兵ノ身體検査終リタル後入別表及ヒ檢
査表ヲ按シ兵役ニ適スヘキ人員ニ應シ徵員配當表ニ基キ兵

種ヲ區別シ府縣徵兵署ニ於テ常備抽籤ヲ行フヘシ
第四十四條 抽籤ハ郡區長ノ撰ヲ以テ戸長或ハ町村中人望ア
ル者一郡區ニ二名乃至三名ヲ限リ徵兵各自ノ抽籤總代トナ
シ之ヲ抽カシム

但本人又ハ親族ノ者自抽ヲ欲スル者ハ其望ニ任スヘシト
雖往復滞在等ノ費用ハ自辨タルヘシ

第四十五條 常備缺員ヲ補フ爲補充兵トシテ一ケ年ヲ期トシ
常備一ケ年ノ徵員ニ基キ若干ノ比例ヲ以テ常備徵員ニ亞キ
之ヲ徵收スルモノトス

第四十六條 抽籤施行ニ先ダテ該府縣籤丁ノ總員及ヒ各兵種
常備補充ノ徵員ヲ記載シ之ヲ抽籤所ニ揭示スヘシ

第四十七條 抽籤ノ法ハ籤丁ヲ調ヘ其人員ニ應シ左式ノ籤札
ニ番號ヲ記シ籤箱ニ納レ籤簿掛ノ側ニ置キ籤丁名簿順序ニ
其姓名ヲ呼ヒ之ヲ抽カシメ籤簿掛ハ抽籤ノ正否ヲ監シ抽キ
舉クル所ノ番號ヲ高聲ニ呼ハシメ其籤札ヲ受取リ籤丁名簿
各自姓名ノ頭ニ之ヲ貼付シ徵兵署ノ印ヲ捺シ又籤簿ニ姓名
番號ヲ記スヘシ

第四十八條 抽籤ノ法例ヘハ籤丁五百人ナルトハ第一番ヨリ
第五百番迄ノ籤ヲ納レ本年常備徵員二百人補充徵員二百人
ナレハ第一番ヨリ第二番迄ノ籤ヲ抽キシ者ヲ常備トシ第
二百一番ヨリ第三百番迄ノ籤ヲ抽キシ者ヲ補充トシ其餘ヲ
以テ落籤トス

但落籤ニ當ル者ハ平時ニ於テ兵役ヲ免ス

兵種 籤札ハ厚紙縱橫凡ソ八ツ切ニシテ之ヲ四ツ折
第何番 ニシ中分ヲ拈ル

第四十九條 抽籤全ク終ルノ後籤簿及ヒ人別表ニ依リ左ノ番
號割符ヲ作り籤簿ニ引合セ割印ヲナシ前條籤札ヲ貼付シタ
ル籤丁名簿ヲ一人毎ニ截チ切り割符ト共ニ之ヲ抽籤總代ニ

番號割符

附シ本人ニ傳與セシム類ノ印ハ威符ト共ニシテ番號割符ニ

府縣國郡區町(村)住族及ヒ職業

戸主名何夏兄弟伯叔甥附籍

明	第何軍管	何	兵種	何	某
治	治	鎮	番號	何	某
臺					
日	年	月	日		

常備軍(補充兵)服役中付候事

第何師
後備
軍管
本部
印

豫備軍ニ編入スル者ハ番號割符ノ裏面ニ番號割符ヲ

年月日

豫備軍編入申付候事

日ニ後備軍ニ編入スル者ハ番號割符ノ裏面ニ番號割符ヲ

年月日

後備軍編入申付候事

近衛兵ニ編入スル者ハ番號割符ノ裏面ニ番號割符ヲ

年月日

近衛兵編入申付候事

補充兵ヨリ常備軍ニ編入スル者ハ番號割符ノ裏面ニ番號割符ヲ

年月日

常備軍編入申付候事

第五十條 補充兵ヲ命セラレタル者ハ常ニ家居産業ヲ營マシメ常備缺員ノ節ハ其鎮臺ヨリ籤順ニ布達シ入營セシムヘシ但本年常備兵入營期限初日即チ四月二十日ヨリ起算シ滿一ケ年ニ至リ終ニ入營ヲ命セサル者ハ平時ニ於テ之ヲ免役スヘシ

第五十一條 補充兵ヨリ常備軍ニ編入セシ者ハ本人入營ノ月日ニ拘ハラス總テ本年ノ常備兵入營期限初日ヨリ算シ三ケ年ノ期ヲ保タシムヘシ

第五十二條 徵兵使ハ各府縣ニ於テ徵兵事務全ク竣ルノ後徵兵各自ノ人別表及ヒ検査表ヲ點檢シ兵種毎ニ常備補充ヲ區

別シ人別表ハ兵卒明細名簿ト題シ検査表ハ兵卒検査名簿ト題シ籤簿ト共ニ其鎮臺ヘ差出スヘシ

第五十三條 徵集名簿并ニ免役名簿其他種々ノ願書及ヒ届書郡區長戸長ノ取調證書總テ徵兵ニ關スル書類ハ府縣毎ニ取纏メ前條諸名簿ト共ニ復命ノ節之ヲ鎮臺ヘ差出スヘシ

第七章 徵兵雜則

第五十四條 常備籤ヲ抽キタル徵兵ハ四月廿日ヨリ五月一日迄ニ入營スヘシ其營所迄ハ府縣毎ニ最寄ヲ分チ戸長之ヲ引纏ヒ出ヘシ但シ入營迄ノ費用ハ總テ定則ニ照準シ夫臧省ヨリ支給スヘシ

第五十五條 籤ノ番號ハ服役中ノ証號タルヲ以テ各自ニ之ヲ

保存スルシテ、常備軍在營中ノ病氣ヲ以テ、各自ニシテ

第五十六條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ
其事實ヲ詳記シ其疾病ニ罹ル者ハ最寄地方醫師ノ診斷書ヲ
添ヘ郡區長ヲ奥書証印ヲ以テ速ニ其鎮臺或ハ營所ヘ届出ヘ

但其年十月一日ニ至ルモ事故猶止マサル者ハ之ヲ入營延
期翌年廻シノ者ト爲シ翌年徵募ノ期ニ於テ更ニ検査ヲ遂

第五十七條 常備軍服役在營中身元轉居スルハ其父兄或ハ
親族ノ者ヨリ直ニ本人ニ通報シ本人ヨリ自己所屬ノ下士ヘ

届出ヘ

第五十八條 常備軍在營中病氣ヲ者ハ軍醫ノ診斷ヲ以テ病院

ニ入レ治療セシメ其上半兵役ニ堪ヘ難キ者ハ兵籍ヲ除ス

第五十九條 常備軍在營中父母ノ重病或ハ非常ノ事故生スル
者一時已ムヲ得スシテ歸省ヲ願フハ其親或ハ親族以者ヨ

リ郡區長ノ奥書証印ヲ以テ鎮臺或ハ營所ヘ願出ルニ於テハ
詮議ノ上往復ヲ除クノ外二週日以内ノ歸省ヲ許ス尤旅費ハ

自辨スルヘシ

第六十條 全國ノ男兒齡十七歳ニ至ルハ國民軍籍ニ入ルヘキ

ヲ以テ毎年一月ヨリ十二月迄ニ十六歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ其戸主本人戸主ナレハ即チ自身ヨリ本人ノ姓名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ戸長ヘ届出ヘシ戸長之ヲ取調ヘ同月二十五日迄ニ郡區長ヘ差出シ郡區長點檢ノ上十月十日迄ニ府縣廳ヘ差出シ國民軍名簿ニ載セ置ク但シ其ノ里書指印ヲ以テ證明スルハ當リ但他府縣ヘ寄留スル者ハ本籍ノ戸長ヘ届出テ寄留地ノ戸長ヘ届出ルニ及ハス父兄ノ重役ハ非常ノ事外ニハ第六十條ノ男兒二十歳ニ至レハ兵役ニ就クヘキヲ以テ毎年一月ヨリ十二月迄ニ二十歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ左式ノ如ク其戸主本人戸主ナレハ即チ自身ヨリ戸長ヘ

届出ヘシ戸長之ヲ取纏メ同月二十五日迄ニ郡區長ヘ差出シ郡區長點檢ノ上個條ヲ區別シ十月十日迄ニ各自ノ届書ト共ニ府縣廳ヘ差出スヘシ府縣廳之ヲ調査シ徴兵諸名簿ニ載セ十二月二十五日迄ニ所管鎮臺ヘ出スヘシ人ノ遺體ニ付ハ徴兵各自届式

職業

平時免役及ヒ一時徵募猶豫ニ當ルヘキ事故アル者ハ其旨ヲ此ニ記載ス例ヘハ

嗣子(承祖孫)相續人) 年月日生 何某

右私何男(弟孫甥又ハ附籍等)ニテ本年何月二十歳ト相成候間此段及御届候也

年月日
 郡(區)町(村)住族及ヒ職業
 戸主何某印
 年月日生
 郡(區)町(村)戸長
 何某殿

第六十二條 他府縣へ寄留スル者ハ其本籍府縣ニ於テ徵募ニ
 應スル下其寄留地ニ於テスルトハ總テ本人ノ情願ニ任ス
 第六十三條 寄留地ニ於テ徵募ニ就シテ欲スル者ニ寄留地ニ
 於ケル身元引受人ノ証書ヲ相添ヘ九月二日迄ニ其旨ヲ本管
 廳並ニ寄留管廳ニ届出ヘシ其本管廳ニ於テハ其地ノ戸主ヲ

ル者ヲ取糺フ上寄留管廳ヘ其旨ヲ通牒シ徵集名簿ノ末ニ附
 シ其事由ヲ詳記スヘシ

第六十四條 徵兵ニ關スル事件ニ付キ年齢及ヒ父母兄弟ノ有
 無ヲ偽リ或ハ身体ヲ毀傷シ或ハ疾病ヲ作爲シ其他詐欺ヲ以
 テ徵募ヲ規避スル者並ニ郡區長或ハ戸長ノ之ニ其證印ヲナ
 セシ者ハ共ニ常律ヲ以テ之ヲ處分ス

第六十五條 第六十四條ニ掲ル處ノ徵募ヲ規避スル者及ヒ第
 六十一條ニ示ス所ノ定規ノ届出ヲ怠ル者ハ之ヲ先入兵ト稱
 シ翌年徵募ノ期ニ於テ檢査ヲ遂ケ第五十六條但書ニ示シタ
 ル入營延期翌年廻ノ者ニ先タチ入營セシムヘシ

第六十六章 徵兵管廳ニ於テ其員ヲ檢査シテ其員ヲ檢査スル

第六十六條 凡六管鎮臺下ニ於テ其兵員ヲ分テ徵員ヲ定ム
 ル左ノ如シ
 第一軍管東京鎮臺常備隊ニ於テ是ノ額五十六名ニシテ
 六歩兵額ニ示テ三聯隊編出ニ意ヲ奉ルニテ兵員共イ聯
 隊六騎兵額 第六十四一大隊ニシテ聯隊ニ以テ兵員共イ額
 手砲兵 共ニ計額ニ二大隊ニシテ
 工兵 兵員共イ額ニ一大隊ニシテ兵員共イ額ニ其額中ニ
 輜重兵額ハ兵員共イ額ニ一小隊ニシテ兵員共イ額ニ其額中ニ
 第六海岸砲兵額ニ三聯隊ニシテ兵員共イ額ニ其額中ニ
 其額人員七千〇二十人ニシテ兵員共イ額ニ其額中ニ
 兵員共イ額中ニ一ノ千三百四十人ニシテ兵員共イ額中ニ

管下府縣

東京 神奈川 埼玉
 静岡 山梨 群馬
 千葉 茨城 栃木
 長野 新潟
 管府一縣十
 第二軍管仙臺鎮臺常備
 歩兵 二聯隊
 砲兵 一大隊 四百四十六人 三分二
 工兵人員 四百三十三人 一中隊
 輜重兵 一小隊

海岸砲兵

一小隊

正員人員四千三百四十人

備員人員一千四百四十六人三分二

管下諸縣

茨宮城管山梨縣

青森

岩手一聯隊

秋田

山形

岩手縣六

秋田縣六

山形縣六

第三軍管名古屋鎮臺常備

對木

步兵

山二聯隊

對木

砲兵

砲六大隊

對木

工兵

一中隊

對木

輜重兵

一小隊

人員四千二百六十人

內一ヶ年徵員一千四百二十人

管下諸縣

愛知

岐阜

石川

靜岡ノ内

滋賀ノ内

長野ノ内

遠江一團

越前一郡

信濃四郡

縣三

步兵

三聯隊

砲兵

二大隊

工兵

一大隊

輜重兵 一小隊

海岸砲兵 二大隊

總員 人員六千七百人

管下府縣 內一少年徵員二千二百三十三人三分一

大阪

和歌山

三重

府二縣六

第五軍管廣島鎮臺常備十八

步兵 二聯隊

兵庫

堺

京都

滋賀

岡山

島根ノ内 因幡伯耆隱岐一團

砲兵 一大隊

工兵 一中隊

輜重兵 二小隊

海岸砲兵 一隊

人員四千三百四十人五百六十三人三

內一少年徵員二千四百四十六人三分二

管下諸縣

廣島

島根

山口

高知

愛媛

岡山ノ内 備中一團

縣五

第六軍管熊本鎮臺常備

步兵 二聯隊
 砲兵 二大隊
 工兵 一大隊
 輜重兵 一小隊
 海岸砲兵 二隊

人員四千七百八十人
 内一ヶ年徵員一千五百九十三人三分二

管下諸縣
 熊本 鹿兒島 大分
 福岡 長崎 沖繩
 縣六

人員三萬千四百四十人
 内一ヶ年徵員 壹萬〇四百八十人
 輜重輸卒看病卒及諸隊職工ハ未タ其徵員ヲ定メス故ニ之ヲ抄ニ算入セス

府三 縣三十六

第六十七條 以上六鎮臺ヲ以テ全國兵備ヲ管シ所屬ノ府縣ヨリ毎歲ノ徵員ヲ召募シ以テ管内ノ守衛ニ充ツ

一	全國徵兵表	徵員數
二		
三		
四		
五		
六		
七		
八		
九		
十		
十一		
十二		
十三		
十四		
十五		
十六		
十七		
十八		
十九		
二十		
二十一		
二十二		
二十三		
二十四		
二十五		
二十六		
二十七		
二十八		
二十九		
三十		
三十一		
三十二		
三十三		
三十四		
三十五		
三十六		
三十七		
三十八		
三十九		
四十		
四十一		
四十二		
四十三		
四十四		
四十五		
四十六		
四十七		
四十八		
四十九		
五十		
五十一		
五十二		
五十三		
五十四		
五十五		
五十六		
五十七		
五十八		
五十九		
六十		
六十一		
六十二		
六十三		
六十四		
六十五		
六十六		
六十七		
六十八		
六十九		
七十		
七十一		
七十二		
七十三		
七十四		
七十五		
七十六		
七十七		
七十八		
七十九		
八十		
八十一		
八十二		
八十三		
八十四		
八十五		
八十六		
八十七		
八十八		
八十九		
九十		
九十一		
九十二		
九十三		
九十四		
九十五		
九十六		
九十七		
九十八		
九十九		
一百		

初年	一萬〇四百八十	常	
二年	一萬〇四百八十	三萬千四百四十	
三年	一萬〇四百八十	備	
四年	一萬〇四百八十	豫	
五年	一萬〇四百八十	三萬千四百四十	
六年	一萬〇四百八十	備	
七年	一萬〇四百八十	後	
八年	一萬〇四百八十	四萬千九百二十	
九年	一萬〇四百八十	備	
十年	一萬〇四百八十	備	

常備歩兵ニ付各種兵員ノ比較
 歩兵貳萬六千八百八十八人

凡百十二分ノ一 騎兵即二百四十人
 凡十二分ノ一 砲兵即二千百六十人
 凡二十五分ノ一 工兵即千〇八十人
 凡七十五分ノ一 輜重兵即三百六十人
 凡三十七分ノ一 海岸砲兵即七百二十人
 合計三萬千四百四十人

各種常備兵一ケ年ノ徵員
 歩 八千九百六十人
 騎 八十八人
 砲 七百二十人
 工 三百六十人

輜重 百二十人
 海岸砲 二百四十人
 合計壹萬〇四百八十人
 第六十八條 補充兵ハ步兵ニ在テハ常備徵員ノ三倍騎兵ハ同
 數砲工兵ハ五分ノ二輜重兵ハ五分ノ三トス
 補充一ケ年ノ徵員
 歩 二萬六千八百八十人
 騎 八千人
 砲 二百八十八人
 工 百四十四人
 輜重 七十二人

海岸砲 九十六人
 合計二萬七千五百六十八人
 第六十九條 各種ノ兵卒其身幹ノ尺度ヲ定ムルヲ左ノ如シ
 砲兵 五尺四寸以上
 海岸砲兵 五尺四寸以上
 騎兵 五尺三寸以上
 輜重兵 五尺三寸以上
 歩兵 五尺以上
 輜重輪卒 四尺八寸以上
 看病卒 四尺八寸以上

諸隊職工

第七十條 常備補充一ヶ年徵員ハ其大要ヲ示スモノニシテ軍隊編制ノ都合ニ由リ若干ノ人員ヲ減少シ又ハ死没除隊其他近衛教導團等ニ撰舉スル者ノ缺員ヲ補フ爲之ヲ増募スルハ時宜ニ由ルヘシ

第七十一條 海岸砲墩ハ目今山野砲兵ヲ以テ之ニ充ツ因テ其兵員ヲ除キ追漸海岸砲ヲ備付ルキニ當テ各處其定員ヲ徵ス

近衛兵編制

第一條 近衛兵ハ常ニ
鞏下ヲ護衛シ偏ヘニ

天子ノ命令ヲ奉戴シ千軍萬馬ノ中ト雖其整整獨歩スルノ膽勇ヲ持有シ又平常ニ在テハ信義ヲ本トシ先進ヲ敬ヒ後進ヲ教導シ總テ隊中ノ掟ヲ守リ全國諸兵ノ模範タルヘキヲ以テ之ヲ諸兵ノ上位ニ置ク就中此兵ハ全國共戴ノ至尊ヲ護衛スルノ兵タルヲ以テ之ヲ全國ニ賦課シ各鎮臺常備新兵ノ中體格最健全ニシテ精神活潑且行狀方正ナル者ヲ兵種ニ應シ各隊中ヨリ撰舉シ之ヲ編制スヘシ

第二條 近衛兵服役年期ノ計算ハ該兵ニ編入シタル年ノ十一月一日ヨリ之ヲ起算シ徵兵令第二條第二項ニ掲ル如ク更ニ三ヶ年ノ役ヲ帶ハシメ滿期ノ上ハ所管鎮臺ノ豫備軍籍ニ編入シ爾後他ノ豫備兵ト異ナルヲナシ

第三條 前條豫備軍中ノ服役計算ハ最初鎮臺ニ於テ在營シタル日數ヲ之ニ通算シ三ヶ年ニ滿ツルノ後後備軍ニ編入スヘシ

第四條 近衛所要ノ人員ヲ定ムル爲各聯隊（聯隊ヲ爲サ、ル隊ニ在テハ大隊又ハ

中小ニ於テ毎年九月一日ノ現員中ヨリ其年十一月一日滿期退營スヘキ人員並ニ右人員中再役志願ノ者及ヒ同日以後在營スヘキ人員ヲ調査シ九月五日迄ニ近衛局ニ報告スヘシ

第五條 近衛局ニ於テハ前條各隊ヨリ報告スル所ノ人員ヲ以テ所要人員表ヲ作り毎年九月十日迄ニ之ヲ陸軍省ニ申告スヘシ

第六條 近衛兵ニ編入スル者ハ各鎮臺ニ於テ本年常備新兵ノ

中生兵術科卒業ノ者ヲ以テ補充兵召集以前ニ之ヲ撰舉シ名簿相添ヘ下士ヲシテ近衛局ヘ送ラシムヘシ
第七條 近衛諸兵ノ身幹ハ總テ鎮臺各種兵ト異ナルコナシ

近衛兵額

兵種	隊數	每一隊人員	總人員
步兵	二聯隊 <small>（即四大隊）</small>	六百七十二	二千六百八十八
騎兵	一中隊	百五十	百五十
砲兵	一大隊 <small>（即二中隊）</small>	百三十	二百六十
工兵	一中隊	百五十	百五十
輜重兵	一小隊	八十	八十
合計			三千三百二十八

鎮臺兵ニ付近衛兵ノ比較

鎮臺	近衛
步 二萬六千八百八十八人	十分一 即二千六百八十八人
騎 二百四十人	凡二分一 即百五十人
砲 二千百六十八人	凡八分一 即二百六十八人
工 千〇八十人	凡七分一 即百五十人
輜重 三百六十人	凡四分一 即八十人

合計三萬〇七百二十人 合計三千三百二十八人

近衛兵毎年撰擧ノ兵員得ハ既テ鎮臺各種兵ノ撰擧ト異ナリ

歩 八百九十六人 凡十分一 即八十九人六分一

騎 五十八人 凡十分一 即五十八人六分一

砲 八十七人

工 五十人

輜重 二十七人

合計千百十人

鎮臺各種兵一ヶ年徴員百人ニ付近衛兵撰擧ノ比較

鎮臺 百人 近衛 十人

步 百人

騎 百人

砲 百人

工 百人

輜重 百人

第八條 近衛兵毎年撰擧ノ兵員ハ其大要ヲ示スモノニシテ軍隊編制ノ都合ニヨリ若干ノ人員ヲ減少シ又ハ死没除隊等ノ缺員ヲ補フ爲之ヲ増募スルハ時宜ニ由ルヘシ

第九條 輜重兵ハ當分第一軍管ニ屬シ東京ニ於テ之ヲ置ク其徵募ノ方法及ヒ人員給養等總テ鎮臺兵ト異ナルコナシ

○番一 渡正 外 元

本按改正ヲ要スル所以ノ要領ヲ陳述スヘシ抑徵兵令ハ明治五年十一月二十八日ノ詔ヲ以テ始メテ之ヲ全國ニ頒布シ爾來世運ノ變遷ニ從ヒ屢其増補追加ヲ經ルト雖モ人民猶ホ兵ハ護國ノ具ニシテ人々其役ニ服シ國家禍アレハ之ヲ禦クハ即チ自己ノ禍ヲ防クノ義務ナルヲ知ラフ近今人智ノ稍進ムニ從ヒ却テ詐偽百出巧ニ兵役ヲ避ルニ至ル加之屢増補追加スル所ノ法令規則モ亦煩冗

錯雜ニ涉リ或ハ其權衡ヲ失ヒ或ハ時勢ニ適セサルモノアリ甚シキハ前年ノ改正今年ニ至レハ大ニ其弊害ヲ生スルヲ以テ漸次免役者ノ數ヲ増シ從テ兵備ノ不足ヲ生スルニ至レリ今試ミニ其徵集人員ノ概略ヲ陳述センニ明治六七年ハ徵兵令頒布後日仍ホ淺ク其着手方法亦未タ精密ナラサルニ際シ佐賀台灣ノ役アリテ事勢倉卒其蹤今日ニ証スルニ足ラサルヲ以テ暫ク之ヲ措キ今明治九年ヨリ十二年ニ至ル四個年間ノ統計ニ據ルニ明治九年ハ全國中二十歲丁壯ノ總員二十九萬六千八十六人内徵集現員一萬九千四百九十五人内志願者六百六十二人採用ノ現員五百八十八人不合格七十二人此割合百人ニ付六人五八四同十年ハ二十歲丁壯ノ總員三十萬五十九人内徵集現員二萬五百九人内志願者三百十二人採用現員四千人不合格

二百七十八人此割合百人計付六八八二三同十一年ハ二十歳丁壯ノ
總員三十二萬七千二百六十九人内徴集現員一萬三千二百九十七人
内志願者六十二人採用現員百七十八人不合格六十一人此割合百人ニ付
四人零六五同十二年ハ二十歳丁壯ノ總員三十二萬五千五百九十四人
内徴集現員一萬二千六百四十八人内志願者七十八人採用現員五十九
人不合格百一十一人此割合百人ニ付三人九三六ナリ此ノ如ク年々徴
員ヲ減スル其詐僞規避ニ由ルニ非ズンハ安ソ斯ノ如ク舊シキモ
ソアラシキ客年第二十號ヲ公布ヲ以テ徴兵適齡以前ノ者ノ分家ヲ
禁止シ徴兵規避ノ途ヲ防遏シタルモ其分家ヲ稱ハ忽チ一變シテ
絶家再興ナリ隱居後別家者ヲ嗣子トナリ又或ハ新ニ分家シタル
女戸主ノ入夫トナル等此ニ一弊ヲ矯レハ彼ニ一弊ヲ生シ變詐百出

勢也遂ニ徴兵令ヲ改正セラルベカラサルニ至レリ因テ今軍制ノ汎
則及民情ノ適度ニ應シ徴募ノ方法ヲ改メ人民ヲシテ兵役ハ國民ノ
義務タルヲ知ラシメ以テ詐僞規避ノ弊ヲ矯ントス夫レ徴兵令ハ從
來其方法陸軍ノ兵員ヲ徴募スルヲ以テ本旨トシ海軍ノ兵員ヲ招集
スルニ適當セザルニ由リ陸軍ハ賦兵ノ法ニ基クモ海軍ハ壯兵
即チ志願者ヲ招集スルニ依リ其規則モ亦殊異ナラサルヲ得サルガ
爲メナリ仍テ今茲ニ徴兵令ヲ稱改メ陸軍徴兵令トナシ以テ之ヲ
區分セシメ又軍制上ニ於テ其進歩ノ程度ニ應シ多少ノ改訂ヲ要スル
モソアラキ今服役ノ年數ヲ定メ其兵籍ヲ定ム即チ從來ノ兵制ハ常
備後備合セテ七個年ノ軍役ニシテ常備ノ人員ハ三萬千四百四十人
其第一第二後備ハ四萬千九百二十人合計七萬三千三百六十八人ト

然レモ一旦事アルノ日ニ當リテ之ヲ徵集スルモ後備ノ人員ハ家
 居常職ニ就キ漸ク其年月ヲ經ルヲ以テ其緩急ニ供スヘキモノ大略
 十中五六ニ過キス是レ豈外患内訌ニ膺ルニ足ランヤ故ニ今之ヲ改
 メテ兵役ヲ十個年トシ即チ常備三年豫備三年後備四年ト定メ更ニ
 其補充兵役ヲ一個年トシ別ニ輜重卒及看病卒ヲ徵集シ平時戰時ヲ
 區別シ常ニ兵員ヲ調整シテ以テ事ノ緩急ニ應セシメントス今此改
 正按ニ據レハ常備豫備後備合セテ十萬四千八百人ニシテ之ヲ從前
 ノ制ニ比較セハ三萬千四百六十八人ヲ増ス是レ其兵籍ニ在ルコト三年
 間ノ長キヲ以テナリ蓋シ其後備軍タルヤ家居常職ニ就クノ年月既
 ニ久遠ナルカ如キモ一旦有事ノ日ニ當テ其十中ノ七八ヲ徵集スル
 ヲ得ハ兵員ノ總計ハ九萬人ヲ下ラス之ヲ國ノ幅員及ヒ其人口ニ比

例セハ僅々タル兵數ナリト雖モ之ヲ從前ノ制度ニ較フレハ漸其兵
 員ヲ増加スルヲ得ヘシ次ニ徵兵免役概則ノ諸條款ヲ改メ之ヲ三夫
 別シ其第一ヲ終身除役トス即チ廢疾不具者ノ如キ兵役ニ堪ユ可ラ
 サル者及ヒ犯罪ノ故ヲ以テ兵役ニ採用ス可ラサル者等ナリ其第二
 ヲ平時免役トス即チ免役ス可キ故アルヲ以テ太平無時ノ日ハ之ヲ
 免シ戰鬪國難ノ際ニ方テハ之ヲ徵集スルモノトス其第三ヲ一時ノ
 徵募猶豫トス即チ事故アルヲ以テ一個年間其徵募ヲ延期スルモノ
 ナリ斯ノ如ク免役ノ部分ヲ區別シ從前弊習ノ由テ生スル所ノ徑路
 ヲ閉チ之ニ換ルニ各自學術ノ程度ニ依テ其免役ヲ得ルノ一途ヲ開
 ク是レ此改正ノ大綱ナリ而シテ其改正ニ係ルノ件々ハ干涉最モ加
 重ナリト雖モ其條款頗ル多クシテ其理由モ亦鮮少ナラサルヲ以テ

一々之ヲ枚擧スルニ違フラス仍テ逐條質議ノ辯明ニ讓ラントス
 ○番二番馬場 聊カ番外一番ノ脱漏ヲ補ハントス夫レ本按ハ漠然タルモノナリ又或ハ記セサルモ不可ナキカ如キモソアリテ他ノ法律ノ秩序齊整文章明備ナルカ如キニ非サルヘシ蓋シ徵兵令ハ天法ト民法ト並行セサルヘカラサルモノナレモ我國未タ民法ノ設ケナキニ由リ本按ヲシテ確然之カ分界ヲ爲スヲ得ヌ加之我人民ハ概シテ兵ノ何物タルヲ解得セサル者多ク彼ノ血税ノ誤解ノ如キ以テ證スヘシ今日ニ至リテハ稍其蒙昧ヲ披クヲ覺フト雖モ今ヤ之ヲ改正セザルヲ得サルノ場合ハ甚タ切迫セルヲ以テ其字句文章ノ如キハ或ハ妥當ナラサルモノアルモ目下止ムヲ得サル以外ハ多クハ皆舊文ヲ存セリ故ニ其未タ十分ナラサル所アルモ亦止ムヲ得テ然ルニ非

サレナリ敢テ名フ各位ノ之ヲ領セラレシトシテ其ノ不公平ヲ

○十四番中島信行 番外一番二番ノ説明ニ依リ本案改正ノ理由ハ既ニ了

悉セリト雖モ今此ニ質問スヘキモノアリ第四第五條ニ平時戰時ノ

字アリ又第五條ニ國民軍ノ字アリ此時ニ當テハ上太政大臣ヨリ下

士庶人ニ至ルマテ悉皆隊伍ニ編制スルモ亦止ムコトヲ得サルヘシ然

ルニ其戰時ト云フハ開戰ノ時ヲ謂フモノトセハ其戰ニハ外國トシ

戰アリ内國ノ戰アリ又百姓一揆モアルヘシ知ラス皆之ヲ戰時ト爲

○スニ在ルカ 本令如五ノ要旨ハ番外一番ニ關シテ其ノ

○番二番波元 平時戰時ノ區別ハ外國ニハ其制度法則アリ本邦ハ其

法則未タ備ハラスト雖モ内外トモニ大小ノ區別アリ全國ノ戰又ハ

其一部分ノ戰ヲ指シテ戰時ト云フモ夫ノ百姓一揆ノ如キハ之ヲ含

蓄セサルナリ然ルニ遂ニ之カ法則ナカルヘカラサルヲ以テ目下其
調査中ナリ今此ニ戰時ト云フハ國民軍ノコニシテ概シテ豫備後備
出征後ノコヲ云フナリ

○廿三番 柳原前光 本令改正ノ要旨ハ番外一番ノ辯明ニヨリテ了解セリ

然レモ更ニ問フ所アリ本案ニハ代人料ヲ以テ免役ヲ得ル條ヲ見
ス然ラハ則チ代人料ヲ以テ兵役ヲ免カル、コヲ得サルノ精神ナラ
ンカ全體代人料ヲ出スモノハ人民中僅々ナルヘキニ本案ハ何ノ理
由ヲ以テ之ヲ刪リタルヤ

○番一 渡元正 五年ノ徵兵令中ニ代人料ノコアリ抑徵兵令ノ旨意ハ
國アレハ兵備ナカルヘカラス而シテ兵ハ人民ノ義務タリ然ルニ金
圓ヲ以テ之カ義務ヲ免スハ全國ノ人民ニ對シ甚タ不公平ニシテ且

公明ナル徵兵ノ主義ニ適セス加之若シ之ヲ爲セハ兵役ハ特ニ貧民
ノ義務トナルノ恐レアリ全體徵兵令ノ正面ハ全國ノ人皆兵ナリト
云フニアリ故ニ代人料ヲ以テ之ヲ免スハ密ニ理ニ於テ當ラサルノ
ミナラス猶且代人料トアルモ我二十歳以上ノモノハ悉ク兵籍中ノ
者ナレハ代人ヲ出サント欲スルモ外國人ヲ雇フニ非サレハ能ハス
之レ是ヲ刪ル所以ナリ

○十八番 津田出 番外一番ハ曰平時戰時ノ區別ハ未タ確然制定スルニ
至ラスト其レ然ラハ本案ハ議スルヲ得サルカ如シ然レトモ已ニ戰
時ト云ハ、豫備後備ヲ出シタル後トアレハ稍其分界ヲ了解セリ此
ニ第二十七條ノ平時免役ノコ及ヒ第五條戰時ト第三十五條ノ戰時
トハ又異同アルカ如シ知ラス果シテ然ルヤ否ヤ

○外番元正 已ニ陳述セシ如ク平時ト戰時トノ區別ハ未タ一定ノ規則ナキヲ以テ近日當ニ之ヲ定ムヘキナリ然レモ第四第五條ノ所謂平時ト第二十七條ノ平時トハ皆同一ニシテ即チ戰時ニ徵集スルモノヲ云フオカキハ本案ハ蓋シテモ同ノ義ニシテモ然レモ

○十八番津田 番外一番ノ答辨ハ齟齬セリ戰時トハ豫備後備ノ出タル後ナリト云フハ已ニ聞クヲ得タリ而シテ本官ハ第三十五條ノ戰時ト第五條ノ戰時トハ其義果シテ同一ナリヤ如何ヲ問フニ在リ

○外番馬場 然リ差異ナキオカキ二十類以上ノ中ニハ悉ク只議中ノ外番津田 對原來平時戰時ノ區別オキ間本案ハ議スヘカラサルモノナリ故ニ本案若シ此事ヲ記載セザレハ即チ止ム苟モ之ヲ記載スルニ於テハ其讀分明ナラシメザルヘカラス然ルニ番外一番ノ辯明

スル如クハ番外二番ノ所謂漠然タルモノナリ且本案ハ國家ノ最大事件ニ關スル者ナレハ宜ク暗ヲ去リ明ニ就カシメサルヘカラス仍テ投票ヲ以テ全部附托ノ修正委員ヲ撰擇ナランコトヲ建議ス

○十二番河野 十八番ノ建議ヲ贊成ス番外二番既ニ本案ヲ漠然タル議案ナリト自認シ而シテ其不十分ナル儘ニ行ハサレバ不都合ナリト明言セリ本官ハ恰モ之ニ反シテ此改正ハ飽迄明瞭ナラシメサルヘカラストス蓋シ徵兵令ハ罰ト榮譽トノ二個ヲ兼併シタルモノナリ第二條ニ強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正シキ者ハ近衛兵ニ拔擢シ更ニ三ヶ年ノ役ヲ帶シムトス是レ榮譽ト義務ト罰ト三箇ノ原則ニ因テ各違フモノナリ何トオレハ縱令榮譽ナルモ其人ノヲ忌嫌セハ故テニ惡事ヲ爲スモ猶自ラ免レシムル者ナキニ非ザレハ

ナリ今夫レ普通ノ人ナレハ三箇年ノ服役ニシテ止ムヘキニ其技藝ニ熟スルト行狀正シキトニ依リ却テ其累ヒトナリ更ニ復タ三箇年ノ服役ヲ加ヘ又下士ニ任セハ更ニ十箇年ノ役ヲ負ハシムト云フ是レ同ク法律ニハ榮譽ナルモ事實ニ於テハ反テ惡事ヲ爲スモ之ヲ遁レシト希圖スル者アルヘシ又第二十七條ノ第十一項ニ文部省所轄體操傳習所ニ於テ修業一ケ年ノ課程ヲ卒リタル以上ノ生徒并ニ體操術卒業ノ者トアリ夫レ本案ハ兵役ヲ遁ル者ヲ防遏スルヲ以テ本旨ト爲ス然ルニ該項ノ如キハ却テ免カルヲ得ルノ道ヲ教フルカ如ク遂ニ天下ノ人民ハ皆相卒ヒテ體操ニ赴クヘキナリ又第三十三條ニ第二十七條第三項第四項及第七項乃至第十五項ノ科目ニ當ルモノト雖モ第六十一條ニ示シタル徵兵各自届出期限ヲ過キ即チ

九月十六日以後ニ係ル者ハ一切之レヲ免役セストアリ是レ已ニ法律上免役ニ當ルヘキ者ナルニ只其届書ヲ怠リタルノ罪ヲ以テ之ヲ免サストナス本官其理ノアル所ヲ知ラサルナリ又人別表ニ氏神ノ名ヲ記スルハ何ノ爲メソ豈煩シキコナラスヤ第五十七條ニ常備軍服役在營中身元轉居スルハ其父兄云々トアリ想フニ轉籍ノコトアルヘシト雖モ太タ不分明ナレハ是レ亦修正セサル可ラス且第六十五條ニ先タチ入營セシムヘシトアルハ本官ノ所謂罰ニシテ先キニ入り先ニ出ルニ於テハ必ス先キニ入營セシムルニ及ハサルナリ本官不肖ト雖モ猶且此ノ如キ不十分ナル點ヲ發見セリ各位ノ卓見ヲ以テセハ猶一層其甚タシキ者アルヲ知ルヘシ是レ本官カ十八番ノ建議ニ同意スル所以ナリ

○十四番中島前二十三番ヨリ内閣委員ニ質シタル代人料ノ點ニ
 向テ番外二番ハ既ニ全國ノ人民ハ皆兵籍ニ入ルヲ以テ代人トナル
 能フナシト答ヘタハ是レ特ニ條理ニ束縛セザル活用ヲ失フノ說ニ
 テテ論スルニ足ラサルナリ殊ニ本案ハ徹頭徹尾缺點ナキヤト問フ
 三決シテ否ヲス蓋シ兵ノナカルヘカラサルハ論ヲ俟タスト雖モ斯
 ヲ如ク人民ニ不便ヲ與ルサルモ行ヒ難キニ非サルナリ若シ番外二
 番ヲ説明シ如ク代人料ヲ削ルハ太々不同意ナリ之ヲ闢テ徵兵令
 發表以來會テ代人料ヲ出セシモノハ實ニ僅々ナリト果シテ然ラハ
 之ヲ存スルモ爲メニ兵員ノ數ヲ減スルニ至ラサルヘシ其他判然平
 時戰時ノ區別ナキ如キモ亦太々不可ナリ之ヲ要スルニ現行法代人
 料ノ一項ハ之ヲ刪ル可ラス譬ヘハ爰ニ大製造所ヲ有スル人アラシ

ニ自ラ其業ヲ興隆セハ其國家ニ益スル豈一人銃ヲ執ルノ比ナラシ
 ヤ是レ既ニ師範學校生徒ヲ卒業免許ヲ得タル者ヲシテ此役ヲ免カ
 レシムルニハ兵トナル者ハ益々其益ヲ大ナルニ依ルト同一
 理ニシテ國ヲ守ル獨リ兵ノミニ止マラサルナリ若シ代人料ヲ存
 セハ國ヲ護ルヲ能ハサルヲ証アラハ止ムヲ得スト雖モ一旦敵入方
 ニ迫リ之ヲ拒クヲ能ハサル如キ秋ニ際セハ本官輩モ一兵卒トナル
 可キノミ然レモ目下本邦ノ形勢猶此ノ如キ甚タシキニアラサルナ
 リ到底番外二番ノ言ノ如ク本案ハ漠然タルモノナレハ十八番ノ建
 議ヲ賛成ス前原合セテ議ヲ行フニ當リテハ其ノ旨ヲ明ニシテ
 ○二十三番前原十八番ノ建議ハ太々其當ヲ得タル者ナルニ由リ之
 ヲ賛成ス而シテ本官ノ意見ヲ陳レハ本案ハ大體三三箇以テ不可アラ

夫レ現行ノ徵兵令ハ其方法密ナラサルカ爲メ詐僞之ヲ免カル、モ
 ノアルヲ以殊ニ本案ノ如ク改正シタリト是レ兵ヲ徵スルノ一方ニ
 對シテハ好都合ナリト雖モ國ヲ立ルノ點ヨリ之ヲ見レハ特リ兵ノ
 ミ國益ヲ爲スモノニアラス教育令等亦以テ國ヲ立ツルノ基礎ト云
 フヘシ蓋シ徵兵ハ人民護國ノ義務ナルモ猶之ヲ遁レント欲スル所
 以ノモノハ何ソヤ一ニ其年數ノ長キニ苦メハナリ本案改正ニ方リ
 テハ兵ノ規律ヲ以テ組織スヘキハ論ヲ俟タスト雖モ二年ヲ過キサ
 レハ家ニ歸リテ常職ニ服スルコトヲ得スト爲スハ誰カ之ニ苦マサテ
 シヤ因テ三年ヲ半分トスルカ或ハ其他ニ良法ヲ講求セサルヘカラ
 ス代人料ノコトハ簡單ニ之ヲ言ヘハ番外一番ノ説ノ如クナレバ之カ
 爲メ免カル、ヲ得タル者ハ明治五年以來僅々百二十九名ノミ故ニ

今其二百七拾圓金ヲ減シテ百圓トナスモ決シテ其免ル、者多カラ
 サルヲ知ルナリ且兵事ニ關シテモ靴ヲ造ルアリ兵糧ヲ運フアリ又
 醫者モアルヘシ必スシモ一兵卒タラサレハ國民ノ義務ヲ盡サスト
 爲スヘカラス要スルニ唯本令ノミ嚴ナルモ之ヲ免カレント欲セハ
 故ヲニ罪ヲ犯シ或ハ自ラ身體ヲ毀傷シテ之ヲ避ル如キ愚者アルヲ
 免レサルヘシ是レ本官ノ十八番ニ同意スル所以ナリ
 ○廿八番前島密 本官モ亦十八番ヲ賛成ス抑本案ハ不全備ノ法案ト云
 フヘシ蓋シ是レ特リ陸軍ノ爲メニ制定セルモノナレハ陸軍ノ爲メ
 ニハ不可ナシトスルモ海軍ノコト亦顧ミサルヘカラス畢竟本案ハ陸
 軍ノ一方ニ偏倚スルヲ免レス故ニ兵ハ守國ノ要具ナリト云フノ點
 ヨリ公平ニ看察ヲ下セハ本案ハ頗ル不充分ナリト云ハサルヲ得サ

○二十番^{佐野}常民十八番ヲ賛成ス抑本案ノ如ク法ヲ密ニスルモ三千五百萬ノ人口ヨリ僅々三萬左右ノ人ヲ得ル能ハスト爲スハ甚々嘆スヘキコナラスヤ古來我邦ハ尙武ノ國ト稱シ今法律ヲ以テ之ヲ驅ルモ纔カニ二三萬ノ徵兵ニ困ムニ至ルハ實ニ云フニ忍ビサルコナリ畢竟兵役ヲ遁ル、モノ多キハ人々詐僞心ヲ抱クヲ以テナルヘシ蓋シ其詐僞ハ惡ムヘシト雖モ亦止ムヲ得サル者アリ從來兵事ハ華士族ノ負擔ニシテ平民ハ之ニ關セザリシニ維新後華士族ノ兵役ヲ解キ普ク之ヲ人民ニ負ハシメ而シテ華士族ハ依然祿位ヲ存シ尙租稅ノ幾分ヲ消耗セルヲ以テ其租稅ヲ出ス者ヨリ之ヲ云ヘハ更ニ華士族ヲ主トシテ多ク之ヲ取ラサルヘカラサルナリ四十萬餘ノ華士族

アリ何ソ三萬ノ兵ニ不足センヤ政府若シ華士族ヲ率先誘導セハ平民モ亦必ス之ニ趣クヘシ今其誘導ヲ爲サシテ單ニ法網ヲ密ニシ之ヲ取ル恐ラクハ後來ノ爲メニ不可ナラン本官ノ曾テ經視セシ所ニ由レハ和蘭ニハ五萬ノ兵アリ而シテ體操學中學等ヲ爲スモノハ大體免カル、コトセリ又奧太利ニテハ學校中ニ兵事課ヲ置キ直ニ少尉試補等ニ任スルヲ得ヘキモノトス若シ文學アルモノハ全ク之ヲ免カレシムト云ハ、人心彌兵役ニ遠サカルヘシ近ク從前ノ士族ヲ見ヨ管ニ文學ノミナラス弓馬槍劍銃砲等ノ武技ヲ學ヒ一旦事アレハ直ニ兵トナルニアラスヤ右等ノ事理ヲ熟考セハ更ニ本案ニ修正ヲ加ヘサルヲ得サルナリ抑我邦千有餘年兵農途ヲ異ニセシニ目下急ニ其任ヲ負ハシムルモノナレハ其功用ヲ爲スコト能ハサルヤ固

ヨリ其所ナリ前陳ノ大意ヲ以テ之ヲ誘導セハ十年ノ後ヲ期シテ必
ス其効アルヘシ又代人料ハ須ラク之ヲ加フヘシ元來我邦ハ大數ノ
兵ヲ徵スルニアラス僅々三萬許ノコナレハ極メテ民心ニ關涉セサ
ランコヲ企望スルナリ

○議長 十八番ノ建議ニ同意者ハ起立セヨ
全員悉起立

○議長 全會一致ナルヲ以テ十八番ノ建議ニ決シ即十五名ノ委員ヲ
投票スヘシ但副議長幹事ハ例ニヨリテ之ヲ除クモフトス且同數ナ
ラハ番號ノ順序ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
得票多數者 津田 出

十八番

十六番 山田 顯義

二十番 佐野 常民

廿四番 細川潤次郎

十四番 中島 信行

○議長 十八番十六番二十四番二十番十四番ノ五名得票多數ナルニ
ヨリ之ニ付托ス其修正案報告ヲ待テ第二讀會ヲ開クヘシ散會セヨ
午前第十一時三十五分閉場

元老院會議筆記明治十二年九月九日

○第百四十六號議按徵兵令及近衛兵編制改正ノ儀布告按 第二讀會

議長 親王

出席議員

三番	伊集院兼寛
四番	福羽 美静
五番	秋月 種樹
六番	大久保一翁
七番	齋藤 利行
八番	大給 恒
十一番	山口 尚芳

元老院會議筆記明治十二年九月九日

○第百四十六號議按徵兵令及近衛兵編制改正ノ儀布告按 第二讀會

議長 親王

出席議員

三番	伊集院兼寛
四番	福羽 美静
五番	秋月 種樹
六番	大久保一翁
七番	齋藤 利行
八番	大給 恒
十一番	山口 尚芳

十二番	河野 敏録
十四番	中島 信行
十五番	津田 眞道
十八番	津田 出
十九番	河田 景與
二十番	佐野 常民
廿一番	岩下 方平
廿三番	柳原 前光
廿四番	細川潤次郎
廿五番	田中不二磨
廿六番	伊丹 重賢

廿七番 河瀬 眞孝

内閣委員 番外 太政官少書記官渡 正元

内閣委員 番外 太政官少書記官馬場 素彦

午前第九時開場

○議長 本日ハ第四百十六號議按ノ第二讀會ヲ開ク茲ニ内閣下附ノ
 按ト本院修正ノ按ト兩個アリ何レヲ以テ本會ノ議按ト爲スヘキヤ
 ヲ定メントス乃チ修正按ヲ以テ議按ト爲スヲ可トスル者ハ起立セ
 ヲ

全員悉起立

○議長 全會一致ナルニヨリ修正按ヲ以テ議按ト爲ス

書記官 木田 親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

布告按

徵兵令別冊ノ通改正候條此旨布告候事

但徵兵令ニ關スル從前ノ布告達及ヒ指令ハ渾テ廢止トス

○議長 本按ヲ可トスル者起立セヨ

全員悉起立

○議長 全會一致ナルヲ以テ本按ニ決ス

書記官本田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

徵兵令

第一章 徵兵編制

第一條 徵兵ハ全國ノ男子護國ノ義務ヲ帶ル者ヲ徵集シ以テ兵役ニ充ル者ナリ今陸軍ヲ大別シテ四ト爲ス常備軍豫備軍後備軍國

民軍是ナリ又其兵丁ノ身材ニ從ヒ步騎砲工等ノ兵種ニ區別ス

但海軍徵兵ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

○十二番河野敏錄 全國ノ男子誰カ護國ノ義務ナカラシヤ然ルニ「護國ノ

義務ヲ帶ル者」ト記スルトキハ全國中或ハ義務ヲ帶ヒサル者アルノ

嫌ヒアリ且内閣ノ原按ニハ此文ナシ仍テ「護國ノ義務ヲ帶ル者」ノ九

字ヲ刪除スルヲ可トス

○四番福羽美靜 賛成

○議長 十二番ノ修正説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲ス

○十一番山口尚芳 十二番ヲ賛成ス明治五年ノ勅諭ニテ全國男子ハ國家

保護ノ義務アルト已ニ明瞭ナリ本條ハ只陸軍ヲ大別シテ云々ニテ

足レリ故ニ本官ハ「全國ノ男子」ナル五字ヲモ併セテ刪ラント欲ス

○二十番佐野常民 十二番ハ全國ニ護國ノ義務ナキ者ナシト云フト雖モ
 耆老ノ人モ之ヲ兵ト爲スヘキヤ本條ノ精神ハ十七歳ヨリ四十歳ニ
 至ル者ヲ包括スルニ在リ原按ニハ「年甫メテ二十歳ニ至ル者云々」ト
 記スレト本條ハ國民軍ヲモ包括スルモノナレハ總テ之ヲ二十歳ト
 云フヘカラス固ヨリ全編ヲ通讀スレハ陸軍ノ四大別ハ分明ナレト
 是レ冒頭ニ其大旨ヲ示スモノニシテ「護國云々」ノ字ヲ茲ニ掲ケレハ
 全國ノ人民ハ決シテ護國ノ任ヲ忘却セサルヲ信スルナリ
 ○十二番河野敏 抑時ニ緩急アリ事ニ疾徐アリ其危急存亡ノ時ニ當リ
 テハ豈老少ノ分別ヲ爲スニ違アラシヤ聞ク西郷隆盛ハ十二歳ノ童
 子ヲモ兵ト爲シタリト素ヨリ兵役ハ人ノ好ム所ニアラサルヲ以テ
 本條ニ義務ノ字ヲ掲ケタルモノ、如シ男子タル者何人カ義務ナカ

ラサラン女子モ亦義務ナシト爲スヘカラス故ニ或議官ハ更ニ男子
 ノ字ヲモ刪ルヘシト云フニ至レリ況ヤ内閣ノ原按ニモ此九字ナシ
 之ヲ要スルニ此九字ヲ刪テ害ナケレハ之ヲ刪ルヲ可トス
 ○二十番佐野常民 義務ノ字ヲ掲ケタルハ人ノ兵ヲ嫌忌スルカ爲ナルニ
 アラス其義務ナルヲ以テ義務ト記セシノミ猶租稅ヲ收ムルハ義務
 ナリト云フカ如シ蓋シ法律ハ其制定スル所ニ據ル縱令他ニ十二歳
 ノ童ヲ取テ兵ト爲セシ者アリシモ之ヲ法律ニ掲ケヘカラス又之ヲ
 徴憑トスヘカラス法律ハ正當ニ適スルヲ主トスルヲ以テ之カ制定
 ヲ爲ス若シ之ヲ刪ラハ其意分明ヲ欠クヘシ畢竟本條ノ大旨ハ老幼
 ヲ徴セサルヲ示スナリ
 ○十二番河野敏 本邦ニハ未タ男子護國ノ義務ヲ帶ルノ憲法ヲ制定セ

ス故ニ良シヤ此九字ヲ記入スルモ未タ之ヲ分明ナラシムル能ハス
今若シ之ヲ存セハ國民ヲシテ却テ疑問ヲ生セシムルニ至ラン到底
删除スルヲ可トス

○二十番 佐野常民 本官ノ全編ヲ通讀セサレハ分明ナラスト云シハ例ヘ
ハ單ニ徵兵編制トノミ記スルモ分明ナラサルヲ以テ第一條ニ其大
旨ヲ掲ケテ全國ノ男子云々トナシ而シテ逐條讀下セハ其意自ラ明
了ナルヲ要スルナリ蓋シ此冒頭ノ九字ハ全編ノ綱領ナリ決シテ刪
ルヘカラス

○十一番 山口尙芳 逐條ヲ通讀セハ其常備軍豫備軍ノ何タルヲ知ルヘク
且五年ノ勅諭ヲ法律トナシ即チ常備豫備後備ヲ以テ國ノ四軍種ト
セリ其年齡ヲ問ヘハ二十歳ノモノトス然ルヲ廿番ノ説ノ如ク冒頭

ノ九字ヲ掲ケレハ他ニ其成文法ナカルヘカラス例ヘハ元老院ノ章
程第一條ニ「元老院ハ議法官ニシテ云々」ト記シ而シテ後條ニ其條目
ヲ記ス此理ニ由テ之ヲ見レハ本條ニハ只其徵兵ヲ分テ四種ト爲ス
ト掲ケ後條ニ至リ常備ハ何々豫備ハ何々ト記スルヲ允當トス

○廿四番 細川潤次郎 「護國ノ義務」ノ字アルヲ以テ意外ノ議論ヲ來シタレ
ハ茲ニ廿番ノ餘論ヲ繼述スヘシ抑護國ノ字ハ素ヨリ茫洋タリト雖
モ之ヲ掲ケシハ全國ノ男子中ニモ其義務ヲ帶サルモノアルヲ示セ
シナリ則チ老幼ハ之ヲ除ク不合格者ハ之ヲ除ク愚駭者ハ之ヲ除ク
犯罪者ハ之ヲ除クト云フノ意ナリ今護國ノ義務ヲ帶ル者ハ何モノ
ナリヤト問ハ、十七歳ヨリ四十歳マテノ壯丁ナリ若シ護國ノ義務
ヲ帶ル者ノ字ヲ删除セハ全國ノ男子ハ老少ヲ撰ハス犯罪者ヲ問ハ

十
ス盡ク之ヲ徵スルノ嫌アリ仍テ原按ナル年甫メテ二十歳ニ至ル者
ノ文ニ換ヘタルナリ若シ護國云々ヲ漫然ナリトシテ刪除セハ「全國
ノ男子云々」下ニ兵ニ徵セサルモノヲ一々歴舉セサルヲ得ス其繁
雜ハ之ヲ記スルニ堪ヘサルナリ若シ之ニ代フヘキ他ノ好字面アラ
ハ決シテ之ヲ拒マスト雖モ文字ノ論ハ第一讀會ニ於テ既ニ内閣委
員カ全國ノ人ヲシテ兵タルノ義務ヲ知ラシメント欲スト云ヒシニ
同意セシヲ以テ斯ク記セシナリ乃チ人民ヲシテ故ヲニ奇異ノ感觸
ヲ生セシメサラント主トセリ蓋シ第一條ニ此九字ヲ掲クルハ男
子タルモノハ盡ク兵ト爲スノ思想ヲ懷カシメサルノ一助ニシテ夫
ノ血稅等ノ誤解ヲ來サシメサルヲ期スルニ足レリ若シ夫レ護國ノ
二字茫洋ナリト云ハ、好字面ヲ以テ之ニ代フヘキモ遂ニ其字面ナ

キヲ如何セシヤ

○七番利行 本官ハ十二番修正ノ說ニ同意ナリ廿四番等ノ反對說ヲ

聽クモ未タ感心スル能ハス其反對說ニ云ク若シ護國云々ヲ字面ナ

キ申ハ老少其他モ共ニ兵トナスニ嫌アリト然レモ兵ニ徵セサルモ

ノヲ歴舉スル能ハサルニ於テハ逐條通讀セサレハ全体ヲ知ルヲ得

ス其知ルヲ得サルニ於テハ之ヲ刪ルモ何ノ不可カ之アラシ蓋シ護

國云々ノ字ニテハ兵ニ徵スル者ヲ包括シ盡サス其盡サハル文字ヲ

掲クルハ果シテ何ノ益アラシヤ

○四番美靜 本官亦十二番ノ說ヲ贊成ス元來本條ハ徵兵ノ大体ヲ示

スニ止マリ其解釋ヲ爲スヲ要セサルナリ明治五年ノ勅諭ハ原按ニ

テ之ヲ掲クルモ本按ニハ既ニ之ヲ刪レリ苟モ其勅諭ハ昭々トシテ

天下ニ存セリ本按ハ其命ヲ改正スルニ止マルノミ故ニ今其徴兵ノ道理ヲ本條ニ揭クルハ重複ヲ免レス七番ノ辯駁ハ先ツ本官ノ心ヲ得タルモノナリ

○廿四番細川潤次郎護國ノ字面ノ如キハ近時法律ノ文例ニシテ歐米ノ式ニ依ルモノナリ例ニハ賣藥規則ノ如キ其第一條ニ此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥云々家方ヲ以テ合劑シ販賣スルモノヲ云フトアリ此レ全篇ノ大旨ヲ一目瞭然タラシムルモノナリ若シ護國以下九字ヲ除キ徴兵ハ全國ノ男子ヲ徵集シ云々ト爲サハ老幼其他モ總テ徵集スルコトナルカ故ニ其全國男子ノ中ニ徵スヘキモノヲ撮舉スルノ意ヲ示セリ否ラザレハ寮口全國皆徴兵ナリトシ遂ニ一語ヲ着セサルノ勝レルニ如カス仍テ護國以下ノ九字ハ存シテ

○徴兵ノ註脚ト見レハ可ナリトス河野敏録抑本按ハ第一條ノミヲ以テ活動スルモノト爲スカ第一條第二條ト區別スルモ通篇一箇ノ文章ノミ然ルヲ僅カニ第二條ノミヲ以テ通篇ヲ活動スヘシト爲スハ如何ナル糊眼者モ之ヲ認定スル能ハサルヘシ又廿四番カ賣藥規則ノ例ハ却テ常備軍豫備軍云々ニ相應スヘク護國云々ニ適當セサルモノニテ所謂自滅論ナリ且護國云々ノ字ハ固ヨリ憲法制定ニ期スヘキ文字ナレトモ今其憲法ナシ故ニ讀者其意義ヲ解シ得ヘカラス若シ夫レ徴兵ノ註脚ト爲サハ全國ノ男子トシテ足ルヘシ何リ故ラニ人民ヲシテ大ニ感觸ヲ生セシムヘキ護國云々ノ語ヲ用フルヲ煩ハカシヤ

○十一番山口尚芳或議官ハ賣藥規則ヲ引テ本條ニ例ス賣藥ト徴兵トハ

其類ヲ殊ニセリ若シ之ヲ徵兵ノ註脚ナリト云ハ、是レ常備軍豫備軍云々ノ四大別ニテ分明ナリ護國云々ハ註脚ニアラスシテ却テ人民ノ大感觸ヲ來ス可血稅ニ異ナルコトナカルヘシ何トナシハ人民往々其何事タルヲ知り得難ケレハナリ

○廿番佐野 駁議ノ要點ハ護國ノ字ハ未タ憲法ニアラサルヲ以テ分明ナラスト云フニ過キス抑明治五年ニ徵兵令ヲ發シ當時勅諭既ニ

國家保護ノ字アルヲ以テスレハ更ニ耳新ラシキ字トハ言フヘカラ

ス且重複ナリトシテ之ヲ删除セハ直ニ老幼等ヲも徵スルコトナル

ヘシ故ニ護國下記シタルノミ若シ其制限ヲ開カ、後條ヲ閱讀スヘ

○廿三番柳原 本官ハ二十番二十四番ノ說ヲ適當トシ且別ニ見ル所

シト云ハンノミ

○ア更テ護國ノ義務ハ憲法ヲ以テ定ムヘキモ、トス試ミニ其文ヲ作

ラハ凡國民ハ兵役ニ参加スルノ義務アリ但シ其徵募ノ方法ト服役

ノ期限トハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムト爲スヘキカ尙未タ足ラサル

所アリ憲法ノ未タ云ヒ及ハサルノ小區別ヲ定ムルニ法律ヲ以テス

ルハ歐米ノ例比々皆是レナリ十三番ノ說ノ如クニシテ始メテ老幼

其他ヲモ包括シ得ルニアラス故ニ之ヲ刪ルモ敢テ不可ナシ試ニ問

フ護國ノ義務ハ何ソヤト常備軍豫備軍是レナリ故ニ其刪ルト刪ラ

サルト同ナリ然レモ二十番二十四番ノ說ノ如ク之ヲ存スルモ亦

敢テ妨ケオカルヘシ

○議長 十二番ノ修正說ニ同意ノ者ハ起立セヨ

○起立者 十人

○議長 多數ナルニヨリ十二番ノ修正ニ決シ且第二條中五項ハ一項
 ○毎ニ決議ヲ取ラントス之ニ同意者ハ起立セヨ
 ○起立者十五人
 ○議長 多數ナルヲ以テ毎項取決ニ決ス
 ○書記官 本田 雄 左ノ按ヲ朗讀ス
 第二條 常備軍ハ男子年二十歳ニ至ル者ヲ各軍管下ノ國郡ヨリ徵
 集シ其當籤者ヲ以テ之ヲ編制シ三ヶ年ノ役ニ服セシメ所管領臺
 三備フル者ナリ
 ○議長 本按ニ同意シ者ハ起立セヨ
 ○全員悉起立
 ○議長 本按第一項ハ二十番等ヨリ提供スル所ノ意見書號外第二十

七號ニ關係アルヲ以テ本日ノ議ハ此ニ止メ明日該意見書ノ會議ヲ
 開クヘシ散會セヨ
 午前第十時二十分閉場

元老院會議筆記明治十二年九月十三日
 ○議事 予前第十部二十位閣員
 開々々々々々々々
 予前第十部二十位閣員
 開々々々々々々々

元老院會議筆記明治十二年九月十三日

○第四百十六號議按徵兵令及近衛兵編制改正ノ儀布告按第二讀會九月九日續々

議長 河野 敏鎌
代理

出席議員

- | | |
|-----|-------|
| 三番 | 伊集院兼寛 |
| 四番 | 福羽 美静 |
| 五番 | 秋月 種樹 |
| 六番 | 大久保一翁 |
| 七番 | 齋藤 利行 |
| 八番 | 大給 恒 |
| 十一番 | 山口 尚芳 |

- 十五番 津田 眞道
- 十八番 津田 出
- 十九番 河田 景興
- 二十番 佐野 常民
- 廿一番 岩下 方平
- 廿三番 柳原 前光

内閣委員 一 番外 太政官少書記官渡 正元
 内閣委員 二 番外 太政官少書記官馬場 素彦

午前第九時四十五分開場

○議長 議長不参ニヨリ本官代理ヲ爲シ第四百四十六號議按第二讀會
 ノ續キヲ開ク例ニ從ツテ發議セヨ

書記官 本田 親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第一項 學校ニ於テ生兵教練中隊教練ノ課程ヲ卒リタル者平時ハ
 服役未タ終ラスト雖モ在營一ケ年ノ後願ニ依リ假ニ歸郷
 ラ許スヘシ

○廿三番 柳原 前光 本項ハ删除ス可シ何トナレハ前ニ提供セシ修正委員
 意見書號外第二十七號ハ既ニ廢棄セシ上ハ併セテ之ヲ廢棄スヘキ
 ノ理ナルヲ以テナリ

○四番 福羽 美静 賛成ス且第二項ヲ第一項ト爲シ順次其項ヲ繰揚ルヲ可
 トス

○議長 廿三番ノ說ハ賛成者アルヲ以テ問題トシ直チニ決ヲ取ラン
 廿三番ノ修正說ニ同意ノ者ハ起立セヨ

起立者十一人

○議長 多數ナルヲ以テ删除ニ決ス

書記官 木田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第一項 原第 殊ニ技藝ニ熟スル者平時ハ服役未タ終ラスト雖モ在

營一ケ年ノ後詮議ノ上假ニ歸郷ヲ許スヘシ

○外番 渡正 歩騎砲兵ノ學術各異ナルハ曾テ説明セシ所ナルニ今

廿番ノ説ノ如ク單ニ一箇年ト定ムルハ太々條理ナキコナリ元來徵兵ノ在營ハ三箇年ニシテ其無事ノ日ニハ歸休セシムルモ猶各在營ノ心ヲ存セシメ有事ノ日ニ當レハ何時モ徵集スルモノナリ夫ノ技藝ノ熟否如何ニ至テハ騎砲等ハ三箇年ニシテ猶未タ熟セサルモ歩兵ハ五六箇月ニシテ熟スルモノナリ然ルニ共ニ一箇年ヲ在營セシ

ムト爲サハ彼ニ足ラス此ニ過キ頗ル財政上ニ關係ヲ來シ最モ上下ノ便利ヲ缺クモノト云フヘシ故ニ時ト人トノ宜キヲ計リテ之ヲ歸休セシムルヲ宜シトス既ニ詮議ノ上ト爲シ又一箇年ノ後ト爲サハ意味モ亦抵觸スルヲ覺フ故ニ一箇年ノ字ヲ刪ルヲ可トス

○廿番 佐野常民 歸郷ヲ許スノ期ヲ定ムルニ或ハ六箇月ノ後トシ或ハ二

箇年ノ後ト爲スカ如キ區々タル法律ハ之ヲ制定スルヲ得ス且僅々タル常備兵ハ六七箇月ニテ歸郷セシムヘカラス縱ヒ歩兵ハ爲シ易ク砲兵ハ爲シ難シト爲スモ概シテ三箇年ヲ以テ原則トスルニ於テハ其歸郷ヲ許スモ亦彼此同シク一箇年ノ後ト爲サ、ルヘカラス而シテ現行ノ徵兵令ニハ詮議ノ上ノ四字ナシ今本項ノ如キハ大ニ修正委員ノ斟酌ニ出ルモノナリ

○七番齋藤利行 本官ハ肯テ番外一番ノ原按維持ノ論ニハ關セサルモ惟

フニ在營一箇年ノ後ナル七字ハ刪リテ可ナラントス仍テ之カ修正

説ヲ提出ス其理由ハ亦喋々ヲ談タスシテ明ナラン

○八番大給恒 賛成

○議長 七番ノ修正説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲ス

○廿番佐野常民 番外一番ハ誤解セリ蓋シ委員ノ修正ハ必ス一箇年ト定

メタルニアラス一箇年ノ後即チ一箇年以上ヲ云フナリ僅々タル常

備兵縦ヒ其技ニ習熟スルモ一箇年ヲモ在營セシメスシテ直ニ歸休

セシムヘキニ非ス他日兵數多キニ至ラハ或ハ六箇月ニシテ歸休セ

シムルノ期アルヘキモ目下三萬ノ兵ニシテ斯ク速ニ歸休セシムル

ハ實ニナシ得ヘカラサルモノトス故ニ若シ一箇年ノ後ト掲ケサレ

ハ良シヤ習熟スルトモ三箇年間ハ決シテ歸休セシメサランコトヲ恐

ル、ナリ且主任ノ官衙ニ於テ詮議ノ上其宜キヲ制スト云フモ法律

上ニ一箇年ノ後ト明記セサル可ラサルモノトス

○議長 七番ノ修正説ニ同意者ハ起立セヨ

起立者八人

○議長 多數ナルヲ以テ七番ノ修正ニ決ス

書記官木田親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第二項原第三項 強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正シキ者ハ在營一ケ年ノ

後撰ンテ近衛兵ニ編入シ二ケ年ノ役ニ服セシメ役終

後豫備軍ニ編入ス

但近衛兵編制ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

○番二番馬場
外素彦

本項近衛兵服役年期ハ原按ニ在營六ヶ月ノ後近衛兵ニ撰擧シ更ニ三ヶ年ノ役ニ服セシムル者トアルヲ本按ニハ在營一ヶ年ノ後近衛兵ニ編入シ二ヶ年ノ役ニ服セシムト修正セリ然レモ此年期ハ必ス三箇年ナラサル可ラス之ヲ二ヶ年ト爲スモハ實際ニ支障アリ何トナレハ從來近衛兵ノ服役ハ近衛編入ノ日ヨリ滿五箇年トシテ全國諸隊熟練兵ノ中ヨリ撰擧スルノ成規ニシテ最初鎮臺ニ在テ其服役始ト三箇年ノ滿期ニ達スル時ニ方リ近衛兵ニ拔擢セラル、者ハ前後八箇年ノ實役ニ服シ其他在營ノ長短ニ由リ或ハ七箇年乃至短キモ六箇年以上ノ實役ニ就クヲ以テ自ラ其久役ヲ厭忌スルノ弊風ヲ生セシカ故ニ今此法ヲ改良スルニ至リシナリ然レハ之ヲ改ムルニハ其服役ヲ三箇年トスルモ二箇年トスルモ強テ差支

テモ三似タリト雖モ若シ之ヲ二箇年トセバ鎮臺ニ於テ大ニ支障ヲ與トス抑新兵ノ營ニ入ルヤ直ニ兵ノ用ヲ爲ス能ハス必ス六箇月間ハ生兵訓練ヲ爲サシメサルヘカラス故ニ新兵ノ入營ハ毎年四月二十日ヨリ五月一日迄ノ間ニシテ其卒業ハ即チ十月ヲ以テ期限トスレハ四月ヨリ十月ニ至ルノ間ハ新兵ヲ交ヘテ鎮臺兵ノ定額ヲ充實スルモ夫ノ未熟ノ新兵ハ之ヲ除キ古兵ニ非サレハ諸勤務ノ實用ヲ爲ス能ハス故ニ原按ノ如ク在營六箇月ノ後之ヲ近衛ニ編入シ二箇年ノ服役トオスモハ毎年十月ニ至リ鎮臺卒業兵ノ内ヨリ近衛ニ撰擧シ其缺員ハ同年ノ補充ヲ以テ之ヲ補充カ故ニ鎮臺ニハ一時ニ古兵ヲ減スルノ患ナク其新古鎮臺ニ現在スルノ人員別紙第二表ノ如ク良シヤ之ヲ充分ナラストスルモ漸ク實地勤務ヲ辯スルニ足レリ

ト然ルニ今修正按リ如ク鎮臺在營ニ簡年以後近衛ニ編入ハ二箇
年ヲ服役ト爲スハ歩兵古册紙第三表ヲ如ク新兵多クテ古兵僅
七人ニ過キ且遂ニ鎮臺諸兵ニ實用ヲ缺ク至ルニ必セリ又近衛
ニ於テ毎半年兵額半數ヲ出入アルヲ以テ毎繁雜少カラザル而
去ラテ出入往來ニ費用モ一萬五千圓許ノ差ヲ生ズ奉假ニ出入
繁雜及去費用增加ニ如キハ暫ク措テ論セザルモ獨リ鎮臺諸兵以實
用ニ支障アルナ如何モ然リ騎兵ニ就テ言フニ毎年新兵鎮臺員
大營スルハ四月五日ヨリ五月其旨至ルヲ間ニ在リ營ハ當明
治十三年入營セシ八十名ノ新兵ハ來十三年四月ニ至リ服役一箇年
ニ滿ルヲ以テ此人員中ヨリ七十五名ヲ近衛ニ撰舉セハ卒業兵以鎮
臺ニ殘ルモハ僅ニ五名ニ止ル然レバ十三年定例入營者八十名ノ

外近衛ニ撰舉知シ七十五名ニ缺員トテ係セテ百五十名ノ新兵ヲ同
時ニ鎮臺ニ入營セザルヲ得ス加フルニ同年滿期ニ當ル者八十
名ヲ除隊スルハ故ニ鎮臺騎兵定額ハ二百四十八大リ之ヲ乘除スレ
ハ在營ノ古兵ハ全ク去テ五名大ルカ如ク彼ト云是レト云ハ近衛服
役ヲ一箇年ト爲スハ到底實際ニ於テ行フ可ラス原按ノ如キハ近衛
ニ撰舉セズル者ヲ以テ鎮臺兵ノ服役年期ニ比スルニ其始メ鎮臺
ニ在營スル六箇月ハ徒爲ニ屬スルカ如ク雖モ固ヨリ近衛兵ハ諸
兵ノ上位ニ立テ諸般ニ支給等臺兵ニ數等ヲ加ヘ其精神活潑行狀方
正ニシテ技藝才能アル者ヲ撰フガ爲メニ六箇月間鎮臺ニ在營セシ
メ生兵術科訓練中各自ノ行狀技藝ヲ鑑査スルニマテサレハ他ニ之
ヲ撰フヘキ方法アルヲ大ニ或ハ言ハシ近衛兵ニ編入スヘキ人員

ヲ鎮臺ニ養成セハ近衛兵ノ服役ヲ二箇年トシテモ敢テ妨ケナカ
ルヘシ是レ言フベクテ行ハカラサルノ説ナリ如何トナレハ近
衛兵ニ編入スヘキ人員ヲ鎮臺ニ於テ養成セシメテハ近衛兵額
ノ半數ヲ各鎮臺ノ兵額ニ配當増加セサルベカラズ而シテ之ヲ各隊
ニ編入スルハ軍隊一般ノ編制ヲ改正セサルヲ得サル而已ナラズ
營所給養其他許多ノ支障ヲ生スルニ至ル又之ヲ各隊ニ編入セサル
ハ近衛撰擧ノ爲ニ各鎮臺ニ一種別異ノ者ヲ設置セサルベカラズ
之ヲ設置スルモ或ハ各隊ニ編入スルモ各鎮臺ノ兵額ヲ増加スル
ハ現今ノ軍制上ニ關係ヲ生スル頗ル大ナルヲ以テナリ故テ現今ノ
兵額ヲ以テ實際ニ活用セシメシト欲セハ原按ノ如クセサル可クサ
ルモトス又或ハ言ハシ近衛兵ヲ鎮臺兵ヨリ取テスル天均ク各地

方ヨリ直接召集シ生兵訓練等都テ臺兵ト同一ニセハ可ナラスヤト
其説甚ダ非ナリ如何トナレハ元來近衛ノ兵額タル歩兵ニ聯隊、騎兵
一中隊、砲兵一大隊、工兵一中隊、輜重兵一小隊トス斯ノ如キ寡少ノ
人員ナルニ近衛ニ於テ新兵ヲ訓練スルハ其訓練中ハ獨リ古兵ヲ
以テ皇居ノ守衛ヨリ風紀衛兵等ノ勤務ニ使用セシメサルヲ得ス是
レ當ニ能ハサルノミナラス又此新兵ノ訓練ニ充ツルニ若干ノ練熟
兵ヲ要スルカ故ニ益實用兵員ノ不足ヲ生スルヲ如何セン加之近衛
兵ハ尋常兵ノ比ニ非サルヲ以テ技藝才能等ヲ鑑査セサル可ラス然
ルヲ各自其郷里ヨリ出タル者ヲ取テ直ニ之ニ充ルハ之カ鑑査ヲ
施スニ違アラサルヲ以テ近衛編入ノ後遽ニ其非ナル者ハ之ヲ除隊
シ又其補缺ノ爲メ新タニ地方ヨリ召集セサルヲ得サルニ至ル此ノ

如キハ兵ノ出入其常ナク實際ノ困難少カラス故ニ鎮臺ニ於テ之ヲ
 鑑査シ然ル後近衛ニ編入スルノ法ハ最モ其當ヲ得タルモノトスル
 ナリ又或ハ言ハシ鎮臺在營六箇月ノ後近衛ニ編入シ三箇年半ノ役
 ニ服セシメ併セテ三箇年ト爲スヘシト此說亦非ナリ若シ論者ノ言
 又如クシハ毎年六箇月間近衛兵額三分ノ一ヲ缺カサルヘカラス如
 何ナレハ近衛兵ノ入營期限ヲ毎年十一月ト假定スルモハ明治十
 二年十一月ニ編入シタル者同十五年五月ニ至リ期滿解隊セシムル
 ニ其年十一月ニ至ラサレハ定例ノ新兵入營セサルヲ以テ則チ五月
 ヨリ十月ニ至ルノ間ハ近衛兵額三分ノ二ヲ守衛其他ノ諸勤務ニ充
 テサルヲ得サルヲ以テ實際支障アルハ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ故
 ニ原按ノ如ク在營六箇月ノ後近衛ニ編入シ更ニ三箇年ノ役ニ服セ

第壹表

シメサル可ラサルナリ

工	砲	騎	歩	兵種	鎮臺	近衛	兵定額并ニ壹ヶ年徵員表
千〇八拾人	貳千百六拾人	貳百四拾人	貳萬六千八百八拾人	鎮臺定額	近衛定額	鎮臺壹ヶ年徵員	近衛壹ヶ年徵員
百五拾人	貳百六拾人	百五拾人	八拾八人	近衛定額	鎮臺定額	近衛壹ヶ年徵員	近衛壹ヶ年徵員
三百六拾人	七百貳拾人	八拾人	八千九百六拾人	鎮臺定額	近衛定額	近衛壹ヶ年徵員	近衛壹ヶ年徵員
五拾人	八拾七人	五拾人	八百九拾六人	近衛定額	鎮臺定額	近衛壹ヶ年徵員	近衛壹ヶ年徵員
七拾五人	百三拾人	七拾五人	千二百四拾四人	近衛定額	鎮臺定額	近衛壹ヶ年徵員	近衛壹ヶ年徵員

第三表

兵種	新古兵内譯		諸勤務并 新兵仕込	差引殘員
	新古兵	内譯		
定額	六百四拾人	六百四拾人	六百四拾人	
新兵	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	
古兵	四百	四百	四百	
工	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	拾貳人
砲	八拾人	八拾人	八拾人	貳拾七人
騎	八拾人	八拾人	八拾人	足四八人
步	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	四拾三人

備 ○ 近衛服役三ヶ年ナルキハ毎年四月入營セシ鎮臺ノ卒業兵ヲ其年十一月ニ撰舉スルヲ以テ近衛兵撰舉ノ爲鎮臺新兵ノ人員ニ關涉スルヲナシ

考 ○ 表中差引殘員ノ區畫中騎兵ニ四人ノ不足ヲ生スルモノハ輻重兵一小隊即チ六拾人ノ中ヨリ之カ代務ヲナサシムルモノナリ

第三表

兵種	新古兵内譯		諸勤務并 新兵仕込	差引殘員
	新古兵	内譯		
定額	六百四拾人	六百四拾人	六百四拾人	
新兵	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	
古兵	四百	四百	四百	
工	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	拾貳人
砲	八拾人	八拾人	八拾人	貳拾七人
騎	八拾人	八拾人	八拾人	足四八人
步	二百四拾人	二百四拾人	二百四拾人	四拾三人

備 ○ 近衛服役二ヶ年ナルキハ毎年四月近衛ニ撰舉スルヲ以テ其補缺ノ爲同時ニ新兵ヲ入營セシムルカ故ニ之ヲ第三表ニ比スルハ新兵ヲ増加シ從テ古兵減スルニ至ル

第四表

步騎兵一大隊中古兵諸勤務內譯表

種 類	兵 種	風 紀 衛 兵	衛 戍	庶 務	庶 務 內 譯			病 室	士 官 舍	浴 室
					職 衛 兵	炊 事 當 番	病 室			
步	十六人	十六人	六百六拾人	六拾人	六拾人	六拾人	八人	八人	拾貳人	
騎	六人	六人	貳人	六拾三人	四拾人	八人	壹人	六人	八人	
砲	十五人	十五人	三拾六人	三拾五人	六人	九人	貳人	八人	貳人	
工	貳拾四人	貳拾四人	四拾八人	貳拾九人	九人	九人	貳人	八人	貳人	

外	合 計	大 臣 護 衛 兵	裝 蹄 使 役	事 故 除 隊	脫 走	罰 人	病 人	兵 舍
八	三百七拾一人	〃	〃	拾人	拾五人	三人	八拾八人	八
八	百六拾四人	四拾五人	拾壹人	四人	三人	拾人	貳拾八人	八
八	百貳拾三人	〃	〃	四人	三人	拾人	貳拾八人	八
八	百三拾八人	〃	〃	四人	三人	拾人	貳拾八人	八

備考 表中病人計人脱走及ヒ事故除隊ノ區畫ニ載スル所ノ人員ハ從來經驗スル所ノ平均數ニ基クモノナレハ時ニ由リ増減アリ	新兵仕込古	三條二付	貳拾七人	拾	人拾	人拾	人
	但新人八	八二付	貳拾壹人	拾九人	拾貳人	拾貳人	拾貳人
管人ノ制	貳年二付	三拾壹人	拾九人	拾貳人	拾貳人	拾貳人	拾貳人

○甘番佐野 番外二番ニ於テ近衛兵三箇年六箇月ノ役ニ服セシムヘキノ說アリ未タ議場ノ問題トナラサレハ之ヲ辯駁スルヲ須ヒスト雖モ本官等委員トシテ三箇年ヲ二箇年トセシハ頗ル心思ヲ費ヤセシコナルヲ以テ今其大意ヲ陳スヘシ抑近衛兵ハ服役ノ長キヲ可トスヘシ何トナレハ至尊ノ護衛ナレハ行狀方正技藝熟練ヲ要スルハ

論ナク經費其他ニ至ルマテ其在營ノ長キヲ以テ便且利ナリトスルモ其反對ニ於テハ法律ヲ以テ徵集スルニ在役ニ偏頗ノコアルヘカラサルヲ以テナリ若シ其法律ヲ以テ拘束スルノ不便ヲ論セハ別ニ志願者ヲ募ルニ如カス然ラハ決シテ其長キヲ厭ハザルナリ前ニ番外一番ハ習熟ノ兵ナレハ五六箇月ニシテ歸休セシムルモ可ナリト云ヒシニ非スヤ既ニ此特典アリ而シテ一方ニ於テハ其行狀ノ正シキ者ハ假令之ヲ辭退スルモ採テ近衛兵ト爲ス若シ自カラ欲スル者ナレハ可ナリト雖モ其行狀正シキカ爲ニ一家生計上ニ於テ大ナル不幸ヲ生スルカ如キ者アルヲ保タス内閣兩委員ヨリ毎ニ論說シタレハ法律上ノ義務トシテ之ヲ取ルニ於テハ決シテ其年限ヲ長短スヘカラス故ニ鎮臺一箇年服役ノ上近衛二箇年トシテ之ヲ公平ニシ

而シテ其缺員ハ補充兵ヲ以テ之ヲ補フトナシ實際別ニ支障ナキヲ
 信ス若シ番外二番ハ尙支障アリトシ又各議官モ之ヲ修正セント欲
 スルノ意アラハ更ニ本官等ニ付シテ之ヲ調査セシメラレシコトヲ望
 ム

○十一番山口 抑兵ハ在營三箇年トナスノ原則アリ若其中ヨリ歸休
 フ許サハ其幸不幸ハ抽籤法ヲ以テ天命ニ委任スルノ外ナシ近衛兵
 ト雖モ亦同一ノ理ナリ人ニシテ行狀方正技藝習練セルヲ以テ却テ
 長ク在營ノ苦ヲ與フルハ何事ツヤ三箇年ノ原則ハ之ヲ動かスヘカ
 ラス只陸軍ノ便宜處分ヲ以テ歸休ヲ許スハ格別ナリトシテ支障ナ
 カルヘシ仍ラ本官ハ本項ヲ修正シテ在營一箇年ノ後ノ七字ト二箇
 年ノ役ニ服セシ区ノ十字トヲ删除セントス然ラハ自在便利ノ法律

トナリ而シテ三箇年ノ原則ハ確然動かサルナリ

○七番齋藤 利行 十一番ヲ賛成ス

○議長 十一番ノ修正説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲スマ

○外一番 渡正 元 十二番ノ修正ハ頗ル便利ナルカ如シト雖モ原按ノ旨
 趣ト大ニ違ヘリ夫レ鎮臺兵ト近衛兵トハ元其旨趣ヲ異ニス蓋シ鎮
 臺兵ハ全國ヲ防守シ近衛兵ハ至尊ヲ護衛ス之ヲ鎮臺兵ト同ク徵募
 スルトキハ同一ノ手數ニテ足ルト雖モ其任ヤ重大ナリ故ニ行狀方
 正ナル者ヲ撰シテ之ニ充テサルヘカラス其實験棟撰ノ歲月ハ全ク
 近衛服役外トナサル可ラス之ニ總數三箇年ヲ加フルモ近衛兵役
 ハ三箇年六箇月トナルノ理ナリ元來近衛兵ハ多ク志願者ヲ取ルヲ
 通例トセリ然ルニ十一番ノ説ノ如ク之ヲ三箇年ト爲ストキハ至尊

ヲ護衛スルノ精神ヲ成立セシメサルナリ而シテ近衛兵ハ豫備軍ヲ置カス現行ノ例ハ五箇年ナレハ其長キニ過クルニ苦シムヲ以テ三箇年トセリ泛思スレハ其長キヲ憂フルカ如キモ軍人ノ志ハ否ヲス五年ノ長キモ從前猶希望スルモノ多カリシ故メテ三箇年ト爲サハ更ニ其多キヲ加フルハ知ルヘシ然ルヲ更ニ二箇年ト短縮セハ實際之ヲ組織スルコトヲ得サルナリ

○十一番山口 番外一番ノ説ハ分明ニ了得セサルモ要スルニ近衛兵役ハ三箇年ニナラサレハ不可ナリトスルノ精神ニ外ナラサルヘシ然レモ常備兵役ヲ三箇年ト爲スハ法律ノ原則ナリ而シテ更ニ近衛兵役ニ至リテ四箇年ト爲スカ如キハ則チ原則ニ戻ルヲ以テ法律上之ヲ許サ、ルモノトス又其説ニ近衛兵ハ志願者多シト果シテ然ラ

ハ別ニ其徵募法ヲ立テ、可ナリ然ラスシテ均ク之ヲ鎮臺兵ヨリ撰マサルヲ得スト爲サハ夫ノ三箇年ノ原則ニ從ハサルヲ得ス若シ志願者ヨリ之ヲ取ルニ於テハ五箇年或ハ七箇年トナスモ其便宜ニ任セテ可ナリ本官ハ本按第二條第二項ノ精神ニ依テ修正説ヲ提出セシナリ敢テ志願兵ノ事ヲ云フニ非ス若シ夫レ鎮臺兵中ノ志願者ハ眞ノ志願者トシテ其原則ヨリ外ナラシムルコトヲ得トナラハ復タ何ヲカ云ハン

○廿番佐野 十一番ノ修正説タル其主旨ハ可ナレモ茲ニ二害アリ目下近衛兵役ハ別ニ編制法ナク只五箇年トナセリ若シ十一番ノ説ノ如クンハ陸軍省ニテ專ラ其役期ヲ永クスルモ知ルヘカラサルナリ故ニ三箇年ノ原則ニ基キ之ヲ二箇年トナスヲ可トス又陸軍省ニ自

在便利ヲ與ヘンニ一箇年又ハ二箇年ト縮メハ編制ノ法律ハ立タサル大リ故ニ原按ニモ近衛兵編制法アリ其法亦併セテ布告スルモ本則タル三箇年ハ之ヲ延スコトヲ得サルニヨリ本按ハ之ヲ但書ニ記シタルナリ若シ近衛兵ハ特ニ編制スヘシト云ハ、亦特別ノ法律ナカハカラス番外一番ノ説ニ之ヲ志願スル者多シト云ヘハ人民義務上ヨリ取ルトキハ其役期ハ延ハス可ラス番外一番若シ辯明書ヲ提出セハ更ニ熟考スヘケレハ議場一過ノ陳述ノミニテハ之ヲ延シテ三箇年ト爲スノ理由アルヲ見出ス能ハサルナリ

○十一番 山口 梅芳 廿番ハ本官ノ意旨ヲ誤解セリ本項ハ鎮臺ヨリ強壯熟練ノ兵ヲ拔擢シテ近衛兵ニ入ル、コトヲ云フ者ニシテ乃チ第二條ノ第二項ニアラスヤ第二條ニハ原則トシテ三箇年云々ノ明文アリテ

其他ハ年限ノコトヲ云ハス本官ノ修正ハ未タ一害アルヲ見ス其鎮臺在營ノ年月ヲ空虛ニシテ近衛兵ニ入り更ニ又二箇年ト爲ス如キノ解説法ハ未ダ之ヲ知ラサルナリ

○四番 福羽 美静 別段ノ建議ヲ爲ス抑兵ノ近衛ニ拔擢セララル、ハ重大ノコナリ目下ノ議論ハ二途ニ分レ一説ハ人或ハ鎮臺兵ヨリ更ニ近衛兵ニ拔擢セララル、ヲ嫌ヒ故ヲニ不品行ヲ爲スモノアルヘシ故ニ年限ヲ短縮スヘシト云ヒ又一説ニハ其年限ヲ明記セスシテ自在便利ノ法ト爲スヘシト云フ其レ此ノ如クハ決議ノ際混雜ヲ生スルヤ必セリ依テ此一項ノミヲ委員ニ還付シ更ニ調査セシムルヲ可トス

○廿三番 柳原 前光 四番ノ建議ヲ賛成ス番外二番ノ説ハ細密ニ過テ分明ナラス十一番ノ修正ハ茫洋トシテ際限ナシ而シテ或ハ曰フ近衛兵

ハ志願者多シト或ハ曰ク志願者ナシト又或ハ曰フ兵役ハ三箇年ノ原則ニ超ユ可ラスト或ハ曰ク三箇年ニ止ムヘカラスト衆議紛々可
 ○否未タ其歸着スル所ヲ知ラス且本按一箇年ノ後ト云フモ亦分明ナ
 ラス何トナレハ其一箇年ノ後ナレハ一箇年半或ハ二箇年若クハ二
 箇年半ニ至ルヤ其期ヲ知ルヘカヲサルナリ是ヲ以テ近衛兵役ノ實
 際ハ三箇年ニ止ムヘキヤ又ハ五箇年ニ至ルヘキヤ未タ本按ノ文意
 〇モ穩妥ナリトナサス是レ修正説ノ出ル所以ナラン廿番已ニ辯明書
 ヲ得ハ更ニ熟考スヘシト云ヘリ旁以テ本項ハ四番ノ建議ノ如クシ
 更ニ第三項以下ヲ議決セラレンコトヲ企望ス
 ○八番大給 本官モ四番ニ同意ス本項ニ就テハ陸軍省ニテ實際區處
 〇ノ方法アリ且徴兵一般ニ關係アリテ重大ノ件タリ且二十番モ更ニ

辯明書ヲ得ハ熟考スヘキノ説アリ番外二番ノ説明ハ多端ニシテ記
 〇臆シ得サル所多ク又二十三番ノ説ノ如ク未タ少シク妥ナラサル所
 〇アリ故ニ再ヒ調査セシメラレンコトヲ希フ
 ○議長 四番ノ建議ニ決ヲ取ラン
 ○廿三番 柳原 更ニ建議スル所アリ假ヒ第二項ヲ修正委員ニ托スル
 〇モ第三項以下ハ陸續議ニ付セラレンコトヲ企望ス
 ○四番 福羽 廿三番ニ同意ナリ
 〇美 美 靜
 ○議長 四番ノ建議ニ同意ノ者ハ起立セヨ
 〇全員悉起立
 ○議長 全會一致ナルニヨリ本項ハ再ヒ修正委員ニ付托シ調査報告
 〇ノ後ヲ待テ會議ヲ開クヘシ且本日ハ茲ニ會議ヲ止メ次會ハ來ル十

五日第百五十五號檢視會ノ後之ヲ開クヘシ散會セヨ

午前第十一時三十分閉場

○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ
○議長 諸君ノ懇請ニ同意ノ人ノ議定スルニ付テハ

元老院會議筆記明治十二年九月十五日

○第百四十六號議按徵兵令及ニ近衛兵編制改正ノ備布告按 第二讀會九月十三日ノ續キ

議長熾仁親王

出席議員

- 一番 東久世通禧
- 二番 水本 成美
- 三番 伊集院兼寛
- 四番 福羽 美靜
- 五番 秋月 種樹
- 六番 大久保一翁
- 七番 齋藤 利行

九番	黒田 清綱
十一番	山口 尙芳
十二番	河野 敏録
十四番	中島 信行
十五番	津田 眞道
十九番	河田 景與
二十番	佐野 常民
廿一番	岩下 方平
廿三番	柳原 前光
廿四番	細川 潤次郎
廿六番	伊丹 重賢

○第百四十六號議案 河瀬 眞孝 不士百
 示奉調會編第百四十二号式月廿六番

○議長 本日ハ一昨日ノ續キ第百四十六號議案第二讀會ヲ開ク例ニ
 遵ヒ發議セヨ
 ○書記官 木田 親雄 左ノ按ヲ朗讀ス
 第三項 原第 上下士官ト爲シテ志願スル者ハ檢査格例ニ照シテ
 官學校又ハ教導團ニ入ラシム
 ○十二番 河野 敏録 本項ハ上下士官ノ志願者ヲ進退スルモノニテ陸軍卿
 ノ行政權内ニ屬スル者ナレハ削除シテ可ナリ

○七番 齋藤 贊成

○議長 十二番ノ説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲ス

○十四番 中島 信行 本官ハ削除ノ説ニ同意スルコト能ハス其説ニ曰ク志願

者ヲ進退スルハ陸軍卿ノ權内ニ在リト然レモ是レ通常一般ノ志願

者ニアラスシテ乃チ一旦徵募セル兵員ヲ採用スルモノナレハ從テ

兵員ノ定數ヲ減スルヲ以テ更ニ其闕員ヲ補ハサルヘカラス故ニ敢

テ熱心之ヲ論スルニアラスト雖モ之ヲ存スルヲ可トス

○十二番 河野 敏鎌 十四番ハ兵士ノ闕員アルヲ顧慮スト雖モ徵兵令中補

充兵ノ項アレハ此等ノ時ニ於テハ直ニ執テ之ヲ補フコトヲ得ヘシ本

項ヲ刪ルモ決シテ不可ナキナリ

○番一 渡元 正 本項ハ刪ルヘカラス夫レ陸軍部内教導團ニ下士官ヲ

召募スルノ規則アルノミニテ其他別ニ下士官召募ノ方法アルナシ

故ニ人民若シ兵卒トナルヲ嫌ハ、乃チ教導團ニ入ルヲ可トスレト

モ遠隔ノ地ニ在テハ只出京費用ノ爲メニ其志願ヲ果サヌ止ムヲ得

ヌ徵兵トナル者アリ此等ハ素ヨリ學問モアルヘケレハ該規則ハ全

ク此輩ヲ取ルカ爲メニ設タルモノナリ然ルヲ之ヲ削除セハ此輩一

旦徵兵トナリタル上ハ縱ヒ其下士官タルヲ望ムモ三箇年間ハ遂ニ

士官學校教導團ニ入ルコトヲ得サルヘシ且現行ノ徵兵令ニモ既ニ此

箇條アリ若シ之ヲ刪ラハ人民ニ多少ノ感觸ヲ來スノ恐レアリ仍テ

本按ニ可決センコトヲ希望ス

○二十四番 細川 潤次郎 徵兵ハ決シテ免カル、ヲ得サレモ其技藝ニ習熟

スルモノハ假ニ歸郷ヲ免スノコトアリ又其志願ニ由リ合格ナレハ教

導團ニ入ルヲ免スハ是レ即チ徵兵ノ權利ヲ掲ケタルモノニシテ既

ニ第四章ニモ海軍兵員ト爲ランコトヲ志願スルモノハ之ヲ許スコトヲ

掲ケタリ是亦本項ト相照應スルモノナレハ削除説ハ不可ナリ

○二十七番河瀬 眞孝本官モ亦之ヲ存スルヲ可トス但検査格例ノ字ニ就

テ疑アリ抑モ該検査ハ何人カ之ヲ爲スヤ徵兵使ノ掌ル所カ若シ然

ラハ之ヲ爲ス必ス支障アルヘシ敢テ其辨明ヲ乞フ

○番一渡元 正該検査ハ徵兵使ノ爲ス所ニアラス徵兵入隊ノ後志願

者アレハ格例ニ照シテ検査スルモノナリ

○二十番佐野 常民本官亦已ニ之ヲ刪ルヘカラスト爲シ向日本按修正ノ

時ニ於テ内閣委員ト協議シテ之ヲ存セリ十二番ハ陸軍卿ノ權内ニ

アルヲ以テ刪ルヘシト云フト雖モ第一項ニハ特ニ技藝ニ熟スルモ

ノハ歸郷ヲ許スコトヲ掲ク本項亦其志願者ヲ許スコトニシテ徵兵ニ許
スノ權利ヲ示スモノナレハ之ヲ法律ニ掲載スルハ決シテ不可ナシ
トス

○議長 十二番ノ修正説ニ同意者ハ起立セヨ

起立者二人

○議長 少数ナルニ依リ十二番ノ修正ハ消滅シ乃チ本按ニ決ス

書記官本田 親雄 左ノ按ヲ朗讀ス

第四項原第五項 技藝ニ熟シ且才氣アル者ハ之ヲ拔擢シテ下士ニ任ス

○十二番河野 敏録 本項ハ必ラス削除セサルヘカラス蓋シ本按ハ技藝ニ

熟シ且才氣アル者ハ必ス之ヲ拔擢シ其人ヲシテ之ヲ辭スルヲ得サ

ラシムルノ法按ナルヘシ豈困難ノ極ナラスヤ曾テ聞ク下士官ハ七

簡年間必ス奉職スルヲ常トスト果シテ然ラハ右ノ場合ニ於テハ前
ノ兵役三箇年ト併セテ十箇年間ノ服役トナル本官又之ヲ聞ク曾テ
大坂鎮臺ニ於テ兵卒ヨリ下士官ニ拔擢セラル、者アリ彼之ヲ辭ス
ル再三遂ニ免サレスト抑第三項ノ如キハ志願者ナレハ必ス困難ナ
カルヘシト雖モ本項ハ壓制シテ服役セシムルモノナレハ其間困難
者ノ生スルヤ知ルヘシ故ニ此ノ如キハ素ヨリ法律ニ掲載スヘキモ
ノニアラサルナリ

○十九番 河田景與

賛成

○議長

十二番ノ説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲ス

○外一番 渡元正

十二番ハ又本項ヲ刪ルヘシト云フト雖モ是レ最モ否
ラサルナリ夫ノ技藝ニ習熟シテ才氣アルモノハ直ニ之ヲ下士官ニ任

ス下士ハ乃チ判任官ナリ本條ノ精神タル徴兵ハ三箇年ヲ原則トス
ルモ其年限中他ニ昇進ノ道路ヲ開キ志氣ヲ獎勵スルノ意ヲ示スモ
ノナリ若シ之ヲ刪ラハ教導團ヲ經サルモノハ都テ下士官トナルコ
ヲ得サルカ如シ故ニ第三第四項ハ共ニ掲載セサルヘカラストス

○十二番 河野敏鎌

本項ハ前項ノ如ク志願ノ字ヲ掲ケス又任スルコヲ得

ルト記セサルヲ以テ既ニ任セラルレハ自由ニ之ヲ辭スルコヲ許サ
ルヘシ若シ之ヲ辭スルヲ得ルトセハ其文ヲ和ラケテ可ナリ且一
々之ヲ掲ケントセハ既ニ下士官ニ任シタル以上ノ下及ヒ戰功ニヨ
リ拔擢スルコト等詳細之ヲ列記セサルヘカラス然ラサレハタトヒ其
辭スルモノアルモ強テ之ヲ許サルヘシ故ニ之ヲ刪除スルヲ可ト

首尾開込ス奉職スルヲ常トスト果シテ然ラハ右ノ場合ニ於テハ前

○二十番

佐野常民

論者ノ言ノ如クセハ遂ニ兵ヲ下士官ト爲スヲ得サルニ至ラン假ヒ一旦下士トナリタリトモ上士官ニ轉シ將佐ニ昇ルモ亦其人ノ才藝如何ニ在ルヘシ但是レ徵兵令範圍外ノコニシテ前條ニ謂フ所ノ編入ト同シカラス本項已ニ任スト云ヘハ任中自カラ免ノ字意ヲ含蓄スル蓋シ一般官職ノ任免ト異ナルコナシ故ニ之ヲ存スルヲ可トス

○十一番

山口尙勞

十二番ノ說ニ從ハ陸軍卿ハ兵ヲ拔擢シテ下士官ト爲スヲ得ス抑本項ハ陸軍卿ニ便宜ヲ與フルモノナリ然レモ若シ之ニ任セラレタルモノニシテ定期ナキ下士官タルヲ好マサルニ於テハ其迷惑モ亦豈甚シカラスヤ本官實ニ其人アルヲ聞ケリ因テ其弊害ヲ救フカ爲メ其志望ニ從ヒノ六字ヲ插入セントス本官既ニ此修

正說ヲ有スルヲ以テ十二番ノ說ト本按ト兩ナカテ之ヲ是認スル能ハサルナリ

○議長

起立者三人

○議長

少數ナルヲ以テ十二番ノ說ハ消滅ス

○十一番

山口尙勞

前陳ノ如ク本項ニ數字ヲ加ヘント欲ス抑第二條ハ在營三箇年ヲ原則トシ其間數多ノ取捨アルヲ示スモノニシテ第四項

ハ兵ヨリ拔擢シテ下士官ト爲スヲ得ルノ便法ヲ與フルモノナリ仍

テ且才氣アル者ハ下ニ其志望ニ從ヒノ六字ヲ插入セントス蓋シ

其之ヲ志願ト爲サスシテ志望ト爲ス所以ノ者ハ下士官モ亦官員ニ

シテ願ノ字ヲ下スヘカラサレハナリ

○十二番 河野 敏謙 本官ノ説消滅シタル上ハ寧ロ其説ニ近キモノニ左袒セサルヘカラス仍テ十一番ヲ賛成ス

○議長 十一番ノ説ハ賛成者アルヲ以テ問題ト爲ス

○外 一番 渡正 十一番ハ志望ニ從ヒ六字ヲ挿入セント云ト雖モ第三項ノ志願ハ其由アリテ之ヲ爲シ其檢査ヲ受ルモノナリ夫レ人民

ニシテ文官タラシヨ望ムモ猶能ハサルハ今日ノ情況ナリ況ヤ武官ノ規律嚴格ナルモノニ於テヲヤ且本項ノ精神ハ預シメ其人ノ志

望ヲ問フニ在リ若シ十一番修正ノ如クセハ人ヲシテ自カラ余ハ技藝ニ熟セリ余ハ才藝ニ富メリ仍テ士官ニ採用アリタシト陳述セシ

メサルヘカラス此ノ如キヲ法律ニ掲載スルハ不体裁モ亦甚ダシカラスヤ況ンヤ本按ト雖モ一回之ニ任スルモ其辭スルノ理由アラ

ハ之ヲ許スノ法按タルニアラスヤ本按決シテ動カス可ラス

○廿番 佐野 常民 修正説ノ不可ナルハ番外一番ノ陳述ノ如シ假令實際幾

許ノ束縛ヲ爲スモ之ヲ辭スルノ自由ヲ許スモノニシテ只原則ニ所謂三箇年間ト雖モ他ニ任用スルコトアルヲ掲グルノミ抑官ニ任スル

ニ其志望ヲ以テスト云フハ何ノ事ソヤ下士官モ官吏ニシテ佐尉將官モ亦同一ノモノタリ既ニ任スト云フ豈之ヲ辭スルヲ得サルノ理

アラシヤ若シ之ヲ束縛シテ辭スルヲ許サスト爲サハ是行政者ノ違法ナリ此ノ如キハ其人ヨリ之ヲ出訴シテ妨ケナシ到底志望云ヤノ

字ハ掲クヘカラスナルナリ

○十一番 山口 尙芳 本項ノ場合ハ志願ハ之ヲ爲スノ權ナシト雖モ志望ハ之ヲ爲スコトヲ得ルナリ例ヘハ人自カラ學ヲ勵ミ或ハ宰相トナリ

或ハ大將ト爲ラシト欲スト云フモ亦同一ニシテ或ハ下士ト爲ラシ
 ヲ望ムト云フ如キハ人ニ對シテ敢テ云フヘカヲサルニ非サルナリ
 陸軍卿モ汝ハ勉強シテ大將ト爲レ中將ト爲レト獎勵スヘキナリナ
 ホレオンカ四百萬ノ兵ヲ十七年間ニ作りタルモ只一ノ希望心ヲ披
 舞セシニ過キス今原按ニモ既ニ陸軍勤仕ノ望ミアル者ハ云々ト記
 スルニアラスヤ苟モ實際兵役ヲ免カレントスルモノヲ束縛シテ之
 ヲ推任センヨリハ寧ロ志望アルモノヲ採用スルノ勝レルニ如カス
 ○十二番河野 十一番ノ説ヲ賛成スル理由ヲ陳フヘシ番外一番カ原
 按ヲ主持スルノ要點ヲ摘メハ一ハ三箇年服役ノ期内ヨリ下士官ニ
 採用スルコトヲ示シ二ハ一旦之ニ任スルモ退職ヲ乞フモノハ之ヲ束
 縛セスト云フニ在リ然レモ其任スルヤ時アリテ辭スルコトヲ得サル

モノアリ乃チ本令第十八條地方長官或ハ書記官ノ内一人之ニ任区
 又同第二十條郡區長ヲ以テ之ニ任区ト云フ如キ是レナリ又修正委
 員ハ其範圍内即チ三箇年ノ服役期内ヨリ採ルヲ以テ之ヲ掲クト云
 フモ範圍内外ハ克ク之ヲ區分セサルヘカラス人ノ進退ノ如キ決シ
 テ其範圍内ニアルモノニアラス然ラサレバ陸軍卿ハタトヒ士官ヲ
 要スルモ遂ニ之ヲ採ル所ナキニ至ラン蓋シ徵兵令ハ瑣細ノ順序ヲ
 モ掲載スト雖モ其徵集等ニ障礙ナキコトハ都テ之ヲ掲クルヲ要セス
 若シ番外一番ノ説ノ如クシハ下士ニ任スルヲ得ト明記スルヲ以テ
 允當トス然レモ是レ陸軍卿ノ爲ニハ太タ權力ノ弱キヲ示スモノナ
 レハ之ヲ掲クルヲ欲セサルヘシ既ニ之ヲ欲セサレハ其未タ任セザ
 ルニ先チ其志望ヲ問フモ亦敢テ妨ケサルナリ故ニ之ヲ删除セサル

以上ハ十一番ノ説ニ左袒セサルヲ得サルナリ

○外番一元番正 十二番ハ本令第十八第廿條ヲ引証シテ下士ノ任ニ中

ルモ亦以テ辭スルヲ得サルモノトノ説アリト雖モ該兩條ノ任ノ如

キハ全ク地方官固有ノ權内ニアルモノニシテ下士ニ任スルトハ廻

カニ殊ナリ下士ノ如キハ其人ノ好マサルニ於テハ乃チ之ヲ辭スル

ヲ得ルモノナリ豈之ヲ同一視シテ可ナランヤ

○十二番河野 誤解ナリ爰ニ番外一番ノ説明ニ對シ本官更ニ其誤解

ト爲ス理由ヲ陳ヘテ之ヲ辨駁セントス敢テ問フ不可ナキヤ

○議長 誤解ノ語ヲ以テ他ノ陳述ヲ止ムルハ未タ嘗テ其例アラサル

ナリ仍テ之ヲ衆議ニ決セントス之ヲ可トスル者ハ起立セヨ

起立者三人

○十四番中島 別段ノ建議ヲ爲ス夫レ誤解ノ辨明ヲナスハ固ヨリ不

可ナシト雖モ他人ノ陳述未タ訖ラサルニ先チ之ヲ誤解ト呼ビ其陳

述ヲ止ムルハ例規ニ違ヘリトス仍テ此ノ如キハ他日ノ慣例トナラ

○サランコヲ望ム

○十二番河野 本官誤解ト呼ヒタルハ無用ト呼ヒテ之ヲ中止セシム

ルニ忍ヒサレハナリ何トナレハ十中ノ九ハ有用ニシテ其一ノ惟無

用ナルニヨリ其一ヲ以テ其九ヲ害セサランコヲ欲スレハナリ

○廿三番柳原 從來誤解ト呼ビテ他ノ陳述ヲ停メタル例アルヲ知ラ

ス無用ナリトセハ之ヲ無用ト呼ビ誤解ナリトセハ他ノ陳述ノ終ル

ヲ俟テ之ヲ辨駁シテ可ナリ

○十二番河野 別段ノ建議ヲ爲ス凡ソ例ナルモフハ其發明者アリテ

○始メテ之ヲ立ルモノナリ若シ例ナキヲ以テ毎ニ行フヘカラストセ
 ○ハ事物ノ進歩ハ遂ニ望ム可ラサルナリ蓋シ本官ハ誤解ト呼フノ發
 明者ナリ廿三番ハ若シ誤解ナリトセハ其陳述ノ終ルヲ俟テ之ヲ辨
 駁スヘシト云フト雖モ長ク誤解ナル不用ノ陳述ヲ聽キ然シテ後チ
 始メテ之ヲ辨駁スルハ實ニ迂遠ノ至ニシテ寧ロ之ヲ其半途ニ止ム
 ルノ簡便ナルニ如カス然レトモ今日ハ既ニ機會ヲ失セリ依テ後來
 ノ爲メ此ノ如キ便法ヲ開カハ如何冀クハ之ヲ衆議ニ問ハレシコト
 ○十四番中島 信行 十二番ノ說ヲ衆議ニ問フニ至ラハ本官ノ建議ハ殆ト
 消滅ニ近シ誤解ノ一聲以テ他ノ陳述ヲ止ムルカ如キハ更ニ詳議シ
 テ之ヲ定ムヘシ一時ノ議ヲ以テ後來ノ例ヲ開クハ不可ナリ假令一
 時ノ例ナリトモ毎時衆議ニ決スルノ例ナリ況ヤ後來ノ例ヲ定ムル

ニ於テヲヤ

○十二番河野 敏

十四番ノ說ハ本官頂門ノ一針ナリ故ニ茲ニ虚心平氣
 以テ誤解云ヤノ建議ヲ取消シ各位ヲシテ貴重ノ時間ヲ徒費セシメ
 タルヲ謝ス

○議長

番外一番ハ前說ヲ繼テ可ナリ
 ○二十番佐野 常民 誤解ノ一聲以テ他ノ發言ヲ止ムルヲ許スト否トハ議

場ノ一問題ナリ從來誤解ヲ辨駁スルハ他ノ陳述ノ終リタル後之ヲ
 爲スヲ例トシ例令誤解ト呼フ者アルモ一議官發言中他ニ發言ヲ許
 ○サ、ルハ議事ノ定例ナリ蓋シ近來往々其定例ヲ破ルコトアリ此ノ如
 キハ遂ニ議場ノ齊整ヲ妨クルヲ以テ後來勉メテ其弊ナカラシム
 ○希フ

○十二番河野敏録 二十番ハ後來ノコニ論及ス實ニ其説ノ如シ本官謹テ

之ヲ了ス

○番一渡元 正 允許ヲ得タルヲ以テ更ニ前説ヲ繼シ本項ハ兵役ヲ三

簡年ト定メタルヨリ取除ケフコヲ云フモノニシテ下士ニ任スルコ

ヲ得ルノ意ナリ修正説ニ戰時ハ下士ヲ不次ニ拔擢スルコアレハ獨

○リ下士ニ任スト云フキハ不次ノ拔擢ヲ爲スヲ得サルヘシト云ヘト

モ陸軍部内ニハ既ニ進級條例アリ其戰時ノ如キハ或ハ三簡年ヲ二

簡年ニ短縮スルコアルモ決シテ不次ニ超擢シテ下士ヨリ將校ニ昇

スコヲ得ス故ニ本項ハナカルヘカラス又免官條例アリテ一ハ願ヲ

○以テ免シニハ政府ノ都合ヨリ免シ三ハ罪アリテ免スル等必ス免ス

ルコヲ得サルニアラス乃チ本項ハ下士官ニ任スルヲ得ルト云フノ

意ニシテ之ヲ辭スルコヲ得ルヤ明カナレハ志望ノ字ハ決シテ挿入

スヘカラサルナリ

○十二番河野敏録 番外一番ハ本官ノ説ニ對シテ本項ノ任ト第十八條第

二十條ノ任トハ差違アリト反駁スルモ本官ハ只任字ノ解ヲ爲スカ

爲メニ彼ヲ引証セシノミ又進級條例ノコハ本官既ニ之ヲ知レリ然

レモ其戰時ニ方リ下士官モ死シ上官モ死シタルトキハ之ヲ何トカ

スヘキヤ乃チ條例ニ依ラスシテ不次ノ拔擢ヲ爲サ、ルヲ得サル場

合アルヤ必セリ或ハ曰ン此ノ如キハ變時ナリト然レモ苟モ軍人ノ

戰時ニ於ルハ其職ニシテ乃チ常時ナリ又下士ニ任スルヲ得ルノ意

ナリト云フモ既ニ得ルト明記セサレハ斷シテ得ルノ意トハ爲シ難

○シ

○十一番 山口 一概ニ任免ト雖モ任ト云ハ、必ス免ヲ得ルト一定シ
 難シ陸軍ノ職務ハ進級條例等アリテ他ノ刀筆吏ノ如キ得易キモノ
 ニアラス元ヨリ徴兵ハ三箇年ニシテ其内ヨリ拔擢シ士官ト爲スハ
 其義務ノ外ナリ既ニ義務外トセハ何ソ其志望ナキ者ヲ任用スルノ
 理アラシヤ又既ニ其志望ナキ者ト雖モ才藝ノ爲メ尋常兵士ヨリモ
 長ク義務ヲ負ハシムヘシト云ハ、不條理モ亦甚タシカラスヤ之ニ
 反シテ例ヘハ在營半年ニシテ下士ニ任セラレ事故ニ由テ之ヲ辭セ
 ハ直ニ兵役ヲ免カル、ヲ得ヘキ理ナリ然ラハ寧ロ他ヨリ之ヲ執ル
 ○モ兵ヨリ之ヲ拔クモ必ス七箇年間勤仕セシムルヲ可トス嘗テ聞ク
 陸軍部内ノ規則ニテ一旦士官ニ任用セラル、モノ八十箇年間勤仕
 セシムルヲ法トスト若シ其義務タル三箇年内ナラハ縦ヒ何レニ使

〇六

役スルモ不可ナシト雖モ下士官ニ拔テ長ク使役セシムト云フハ豈
 不條理ナラスヤ但志望アル者ハ格別ナリトス然ルニ番外一番ハ志
 望ノ字ヲ以テ法律文中ニ挿入スルヲ不可ナリト云テ其理由ヲ詳述
 セス本項ハ前項ノ如ク志願スヘキモノニアラサレモ其志望ニ至リ
 テハ自ラ之ヲ云フヲ憚ルヘキニアラス要スルニ本官ノ修正ハ一ハ
 人民ノ義務ヲシテ平均ヲ得セシメ一ハ其志望ヲ遂ケシムルニアル
 ナリ
 ○二十番 佐野 下士官ノ年限ハ別ニ條例アリテ其方法ヲ定ムルヲ以
 テ三箇年ノ兵役期限内ニ之ヲ爲サシムルニアラス是レ兵役ニアラ
 スシテ官人ナレハナリ元ヨリ其年限ヲ定メサルモ命アレハ受ケサ
 ルヲ得ス而シテ又之ヲ辭スルヲ得ヘキナリ然レモ下士官ニ任セラ

レ直ニ歸郷ヲ得ルコトハ實際之レアルヘカラス志願ハ自己ノ願ナリ
 志望ハ人ノ思想ナリ人ノ思想ハ法律内ニ定ムヘキニアラス志願ハ
 下ニアリ之ヲ命スルハ上ニアリ假令上ヨリ命スルモ下之ヲ好マサ
 レハ之ヲ辭スルヲ得ヘシ又十二番ハ第十八條等ヲ引証シテ巧ニ任
 字ノ解釋ヲ爲スト雖トモ戸長等ハ其任ヲ受ケサレハ其本官ヲモ共
 ニ辭スヘキノミ彼是固ヨリ同意ニアラス内閣下附ノ原按第六項
 ノ下ニ任セラレタルモノハ更ニ十箇年ノ役ヲ帶ハシメ前七年ハ常
 備軍ニ服セシメ云々トアルハ或ハ義務ノ如キ嫌アルカ故ニ既ニ之
 ヲ削除シタル位ナレハ本按ハ決シテ不可ナシトス
 ○番ニ番渡正 十一番ノ駁説ハ一々答ヘサルモ志望ノコトハ既ニ二十
 番ノ説ヲ以テ分明ナリトス而シテ尙一言ヲ要スルコトアリ志望ノ字

ヲ挿入スルノ不可ナルハ志願ハ書面ヲ以テ爲スヲ得ヘキモ志望ハ
 書面ヲ以テ爲スヘキニ非サレハナリ且陸軍ハ人ヲ拔擢スルニ一々
 其志望ノ有無ヲ問フモノトナスカ將官之ヲ問フノ例ナク又下ヨリ
 之ヲ述フルノ例ナシ蓋シ兵ハ規律嚴格ナルモノニシテ決シテ自カ
 ラ昇級等ノコトヲ申請ス可ラサル者ナレハ修正按ハ到底不可ナリト
 ス

○十一番 山口 尙芳 平生其人ノ才能アルヲ知リ之ヲ拔擢セントスルニ當
 リ其之ヲ欲スルヤ否ノ志望ヲ問スハ決シテ不可ナシ何ソ例ノ有無
 ヲ論セシヤ抑兵役ハ三箇年ニシテ固ヨリ之ヲ伸縮スルコト能ハサレ
 トモ己ニ下士官トナレハ其役三箇年以外ニ及フモノナルカ故ニ青
 雲ノ志アリテ年限ノ長キヲ恐レサルモノヲ採用スルヲ以テ可ナリ

トス若シ本項ノ如クンハ推任セラル、モ遂ニ之ヲ拒ムコトヲ得サルニ至ラン豈修正セサルヘケンヤ

○議長 時正午ニ至ルヲ以テ午餐ノ爲メ一旦散會セヨ

正午閉場

午後第一時開場

○議長 午前引續ノ會ヲ開ク

○四番福羽 美静 才藝ト志望トハ固ヨリ異同アリ而シテ本按亦甚タ危キ

モノナリ凡ソ軍人ハ嚴格ナル規則ヲ以テ使役ス若シ才能アルモ其志望ナキモノヲ拔擢スルニ於テハ其人ノ困難思フヘシ故ニ本官ハ本文ハ之ヲ存シ別ニ但書ヲ加ヘテ但任官ノ際之ヲ辭スル者ハ本條

ノ限ニ在ラスト爲サント欲スルナリ

○十一番山口 尙芳 四番ノ説ハ全ク本官ノ意ト同一ニシテ要スルニ本官

ハ只法律上同等ノ權利ヲ得セシメントスルニ在ルノミ蓋シ歐州各國ハ拔擢以前概テ其志望ヲ問フヲ以テ常トス本邦ノ如キハ突然官ヨリ之ヲ命ス是レ舊來ノ弊風ニシテ一洗セサル可ラサルナリ故ニ本官ハ志望云々ノ修正説ヲ提出セシモ今四番ノ説ヲ聽クニ一層安帖ナルヲ覺フ仍テ本官ノ修正説ヲ退カンコトヲ乞フ

○議長 十一番ハ其修正説ヲ退ケント乞フ因テ之ヲ衆議ニ決スヘシ同意者ハ起立セヨ

起立者十七人

○議長 多數ナルヲ以テ十一番ノ修正説ハ之ヲ退クヲ許ス